

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可  
令和八年四月一日発行（毎月一回一日発行）  
第二十五卷 第一号（通巻二八九号）

# 万象

B A N S Y O

四月号

2026. 4



四月の句

花の雲男の背を見失ふ

江見悦子

なんとも艶やかな句である。男の背を見失っているのは女性である作者であろうが、男は誰かと考えさせてしまう一句。夫婦で花見に行き、人波の中で連れを見失うことはよくあることだ。

しかし、それをドラマのワンシーンのような言葉に置き換えてしまう。日常の出来事を詠んでいるながら、その日常を感じさせない手腕。作者には似たような句がまだある。

髪を梳く鏡に夜の新樹かな

辻立ちの寒行僧の眼に恋す

作者の心の瑞々しさに感心する。これらの句から立ち現れる女性像は読者の想像に委ねられる。

(小池清晴)

令和八年

四月号

# 万象

BANSYO

はぢをすて人にも  
もの問ひ習ふべし  
是ぞ上手の基なりけれ

千 利休（利休百首より）

# 万 象

令和8年4月号

主宰作品 春の雪……………江見悦子 4

万象の窓④⑨ この冬の雪……………江見悦子 5

名誉顧問作品 雪……………小林愛子 6

## 風音集

中村千久・福島せいぎ・柳澤宗正・中條睦子  
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中愛子  
榎本文代・神田美穂子・井村和子・前田貴美子

風音散歩④⑪（四月号）……………小林愛子 10

## 同人作品

江見悦子選……………11

同人作品の佳句……………江見悦子選 30

### 同人会だより

俳句と共に五十年……………山本とく江 32

2月の「万象」オンライン同人句会高点句

会計からの連絡……………万象俳句会会計・同人会会計 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞（二月号）……………神田美穂子 34

### 同人特別作品

梅の里……………大内佐奈枝 36  
虫送り……………杉澤修 37

特別作品評（二月号）……………荻野加壽子 38

|   |       |  |    |
|---|-------|--|----|
| 私のこの一句  | ..... | 高田たみ子・新妻 奎子・穂苅 照子・荻野加壽子                      | 39 |
| 新同人競詠作品 (江見悦子選)                                 | ..... | 松永 博子・松井 宣夫・松田 好子・入河 大河<br>奥澤よし江・井端 久子・辺野喜宝来 | 40 |
| 続・風のしをり <sup>⑳</sup> 子規の写生論の展開 (五)              | ..... | 高木良多   | 44 |
| 万葉の抒情 <sup>㉑</sup> 『万葉集』にたずねる抒情の源流 <sup>㉒</sup> | ..... | 橋本 清   | 45 |
| 万象ノオト「血圧」                                       | ..... | 松井 宣夫・松田 好子・米田 敏子<br>鈴木 隆久・野崎 浩子・園田 清子       | 46 |
| 巻頭作家 (三月号) プロフィール 菅原雅子 (金沢)                     | ..... | 中條 睦子  | 48 |
| <b>万象作品</b> 江見悦子選                               | ..... |  | 49 |
| 北から南から 小河内のひよんどり (静岡)                           | ..... | 大村 峰子  | 58 |
| 珈琲ぶれいく <sup>㉓</sup>                             | ..... |  | 59 |
| 万象作品の佳句   | ..... | 江見 悦子  | 60 |
| 新中央句会報 (1月例会)                                   | ..... |  | 62 |
| 薄荷飴日月譚 花冷えや木乃伊横たふ硝子箱                            | ..... | 中村 千久  | 65 |
| ルビーの小函 (四月号)                                    | ..... | 編集部・校正担当                                     | 67 |
| 東西南北  | ..... |  | 68 |

春の雪

江見悦子

(主宰)

悼 谷廣司さん、下嶽孝一さん

寒の月好漢二人逝きたまふ  
黙禱に寒禽の声こぼれたり  
凍つる夜の揺れゐる銀のイヤリング  
皿小鉢寒夜の水に浸し置く  
羽散らし組んづ解れつ寒鴉  
春浅しコーヒークップ金と青  
ひとひらの笹漬の香や春の雪

この冬の雪

江見悦子

年が明けてからの大寒波、大豪雪は、各地に大きな雪害をもたらし、雪かき中の事故で亡くなる方も多数出て、今までにない災害となっております。太平洋側の冬晴の日々を申し訳なく思っています。2月で44回を数える「『万象』オンライン同人句会」でも雪を詠んだ句が気になりました。その中で「ただならぬ世のただならぬ雪の嵩 小林愛子」に感銘を受けました。「ただならぬ世」に込められているのは、日本だけでなく世界中に広がっている課題、たとえば温暖化、戦争、人種問題、政治、経済、外交等の諸問題を暗示しているようです。「ただならぬ雪の嵩」には、新潟を故郷とする作者の、雪に対する格別な思いがあります。まさに社会性の強い一句です。

「俳句界」2月号で、中川雅雪氏の作品21句を拝読しました。能登半島地震による被災で主宰誌「風港」を閉じられ、ご不自由な仮住まいの中で俳人協会評議員、石川県俳文学協会会長としても活動されています。発表された作品「雪しづく」を紹介します。

初雪や残る葉の色薄く透き 雪卸し大屋根に星仰ぎゐて  
 雪の上に音なく雪の積もりけり 雪の夜や琉球の酒手酌して  
 雪払ひつつ手渡しの回覧板 給水を待つ子のつくる雪つぶて  
 来人も先ゆく人も雪のなか 降る雪や戸口の狭き仮住まひ  
 自動ドア開き舞ひ込む雪女 白山の雪をまぶしむ別れかな  
 小さき手に丸く叩かれ雪だるま 牡丹雪ネオンの色に染まりけり  
 一搔きの雪より笹の跳ね上がる 雪解川酒蔵裏を抜けて来る  
 雪搔きの火照りを冷ます雪の上 雪しづく落つる間際に焔めけり  
 絵巻めく雪の連峰屏風立ち 残雪をくぐり来て水ほとばしる  
 日曜の人動き出す深雪晴 水音の辺り明るき雪解かな  
 屋根の雪おろす梯子を雪に挿すし

雪と共にある日常を淡々と、平明でやわらかな表現で詠まれた詩情あふれる作品です。「風」以来、同輩として共に歩んできた雅雪さんの、今後の穏やかで豊かな明け暮れを願っています。

雪

小林 愛子  
(名譽顧問)

ポツペンと鳴れり諦めかけしとき  
湯がたぎり深雪の国の手毬唄  
父母を回想独り占めして吸入器  
沈みゆくまでを飛びけり冬の虫  
冬の日の温みも豊み浜の地図  
ただならぬ世のただならぬ雪の嵩  
春の雪鍋に小豆の小躍りす

寒の水 中村千久

(編集人)

枯れつくし立ちつくしたる大樫  
白き息吐いて真つ赤な嘘をつき  
ころころとのんど落ちくる寒の水  
亡き人の閨の空つぽ冴返る  
藪陰のおぼろの闇にけもの道  
太き骨昭和二十年三月十日また小さき骨空襲忌

初夢 福島せいぎ

(願四)

初夢の夢のつづきの野を歩く  
鷗舞ふよき日の鏡開きかな  
あたたかき井戸水を汲む阪神忌  
寒声の喉をつぶせと叱咤せり  
大寒やひとり物言ふ炊飯器  
野施行の狸に京の油揚げ

草青む 柳澤宗正

(顧問)

初雪のちらつく窓辺遠汽笛  
野に空に弾くる声や櫓遊び  
張り出して川の中ほど薄氷  
米寿祝の花香しき二月かな  
山城の馬場の跡や草青む  
パンダ去ぬる上野の森の余寒かな

梅一輪 中條睦子

(同人会会長)

三日三晩居すはり続け雪女郎  
池底に動くもの無し寒土用  
せせらぎの光に寒の梅一輪  
エンドロール襟巻ゆるく巻き直し  
春を待つ望遠鏡のレンズ拭き  
朝の雲薄紅に春立てり

残る雪

松原智津子

(北海道)

篠笛

沢辺たけし

(千葉)

猛吹雪果て紺青の空眩し  
寒明くる古漬の樽洗はねば  
佐保姫の遅遅たる歩み先遠し  
北窓に明るき日差し春戻る  
河川敷黒黒累累残る雪

不忍池ばうばうと蓮の骨  
旧道に沿ふ一枚を冬耕子  
吹初の篠笛律のやはらかき  
一炊の湯気大寒の気を緩め  
枝から枝へ走る鳥影木の根明く

夕東風

亀田やす子

(栃木)

鷓鴣の恋

吉中愛子

(東京)

天主堂の空に浮雲梅の花  
冬日燦礼拝堂のがらんど  
夕東風や木造りの舟打ち合へる  
微動だにせず水底の寒の鯉  
團十郎のとりの睨みに厄落とす

指痛きまで悴むや投票日  
一月の空広々と慈姑いる  
凍つる股打つて車夫発つ大提灯  
立春奈良古梅園や採煙小屋を人動く  
追ひかくる鼻赤々と鷓鴣の恋

春近し

榎本文代  
(神奈川)

雪の花

井村和子  
(石川)

冬耕の一人となれり風の音  
包丁研ぐ鉄の匂ひの寒さかな  
春近し沙羅の木肌の細やかに  
飴色に透くる奈良漬春隣  
仏壇に朝日射し入る水仙花

海神の沖に溶けゆく寒夕日  
露座仏のほそき眼差し雪の花  
ふぐと汁呑んで行けよと朝市女  
亡き母の齡を偲ぶちやんちやんこ  
糸切歯糸をも切れず春愁

春立つ

神田美穂子  
(静岡)

さてもさても

前田貴美子  
(沖縄)

箱眼鏡銜へ直して海鼠つく  
大寒の日差しに晒す河豚の鰭  
鍵盤にをどる十指や春近し  
梅東風や巫女は欠伸をかみころし  
春立つやキューピーの背の小さき羽

覗かるる鬱の一眼浮寝鳥  
遺されて宿す雨音去年今年  
御降りのしじまさざ波みづたまり  
朝摘みの土のかるさや薺粥  
さてもさても点前よ酒よ初句会

# 風音散歩 ④(四月号)

小林愛子

インドロール襟巻ゆるく巻き直し 中條睦子

映画館であろうか、いま目の前のスクリーンには、インドロールがテーマ音楽に乗って延々と流れ、観客の感動の余韻をくすぐる。すぐには立ち上がろうとしない人々。

館内が明るくなれば、夢から日常に戻る時。「襟巻ゆるく巻き直し」のゆったりした動作に満ち足りた心を垣間見る。それにしても上映作品は？ 句の読み手はここで自分自身の名画を胸に描くであろう、そんな含みを持つ句である。

朝摘みの土のかるさや 齋粥 前田貴美子

齋は正月の七種の一つ。花咲き実をつければ三味線草、ペんぺん草ともいう。ロゼットに広がった若苗を摘んで齋粥に入れたのである。「土のかるさ」は乾燥した土の脆さを指す。春の七草の中でも、芹、齋は最も一般的なものとして、この二種を粥に入れたりする。七種の雑しことばにも「……唐土の鳥と、日本の鳥と、渡らぬ先に七種齋」などという。

吹初の篠笛律のやはらかき 沢辺たけし

篠笛は細い篠竹で作った横笛。基音の高低により長短12本の種類があるという。獅子舞、里神楽や歌舞伎囃しに用いる。

新年に初めて吹く稽古始めであろうか、仲間による演奏か、また一人かもしれない、律の柔らかさに得心がいく。律は日本音楽で音程を示す単位、洋楽の半音に相当する。

立春や 採煙小屋を人動く 吉中愛子

奈良 古梅園

古梅園は室町時代1577年の創業で、今も昔ながらの製法を守っているという。10月から翌年2月下旬まで製作、採煙は土器に菜種油を入れ燈心を浮かべて燃やし、土器の蓋の煤を掻き集める。それに溶いた膠を入れて練りあげる。

大変な工程で、職人の手と足は神業のように動き、裸に近い身体は真つ黒、「立春」の言葉がみあかしのように光る。

寒明くる古漬の樽洗はねば 松原智津子

「寒明」は寒の終わる日。「立春」と同じであるが喜びよりもやれやれ終わった、という気分の方が大きい。

昔ほどではないが北国では冬に備えて漬物を沢山用意する。冬籠りへの備蓄である。掲句の「古漬の樽洗はねば」は備蓄の終了、冬籠り気分を解いたのは女性たちであった。

團十郎のどりの睨みに厄落とす 亀田やす子

「厄落し」は節分の夜、厄年にあたっている者が氏神などに参詣して厄をはらうこと。厄は女が33歳、男は42歳が中心。AIの世、櫛やふぐりを落とすのは古いとばかり歌舞伎見物としゃれこんだ。お目当ては市川團十郎のどり、團十郎の見得の睨みに多いに痺れた。厄落しはこれで良し。

# 同人作品



江見悦子選

札幌岡本敬子

一人びとり誰をも照らす初日かな  
おでん煮る味の染みたる落し蓋  
獣みな雪に印せり足の跡  
冬木統べるかに聳えをり捨てサイロ  
山なみの澄みて寒さの極まれる

札幌林陽子

絵蠟燭冴ゆる灯の下母想ふ  
厚雲の奥とて眩し大初日  
風花の舞へば鴨鳴く千木の空  
湧くごとく藻岩山をたてり寒鴉  
初灯明掲ぐる夫の背老いて

札幌落合裕子

御降りの大地清むる白さかな  
いつも来るいつもの一羽初鴉  
初夢の母はつきりとさやうなら  
社殿よりもる笙の音淑氣満つ  
早朝のマイナス十度寒に入る

札幌濱谷和代

凍空や山の端薄き茜色

雪道に足跡深し初出勤  
寒の入月の満ち欠けはじまりぬ  
裸木や枝の間の空白し  
凍裂や原生林のそこかしこ

札幌 大内 和憲

荒行の錫杖響く初山河  
不動尊に微光放てり初日の出  
雪積めり廃線の錆かくるほど  
混沌の往診器材去年今年  
深雪晴鳥声止まぬ原生林

札幌 紅露 恵子

篠懸の大樹の鈴や冬うらら  
雪吊や桜木張るはゆるやかに  
雪しまき湖畔へ下る急階段  
湖を風不<sup>よ</sup>死<sup>ぶ</sup>岳<sup>し</sup>風唸らせて  
太古より空映す湖去年今年

札幌 大内 マキ子

金色の馬蹄添へあり松飾  
凍鶴の踏み出す一步待ちにけり  
地吹雪の白鳥玉となり眠る

冬の虹怒濤の海をひとまたぎ  
初空に小さき指のVサイン

札幌 中鉢 弘一

年賀状の木目の掠れ版木彫  
木箱重ねて鮮魚屋の初商  
色いまだ小さき鉢のやぶ椿  
冬の日や鳥の子色の沼の面  
冬曙地平囲むや浅<sup>あ</sup>緋<sup>ひ</sup>に

※浅緋……ほんの少し眞みがかつた淡い赤色  
札幌 北浦 詩子

注連飾る国道沿ひの地藏尊  
初御空丸みを帯びし水平線  
野天湯の手すりに氷柱連なりて  
冬晴や上枝に透くる空の青  
煙突に煙しらじら冬館

江別 佐藤 哲

風筋の見えて原野に雪しまく  
冬どなり石積み上げて番屋閉づ  
川のみが村つなぎけり大枯野  
廃村の枕木の果海凍つる  
丹頂に逢ひしよ村は深眠り

江別 太田 佳美

小さき手で鈴の緒振れり初詣  
初御空戦火の消ゆる星であれ  
亀のごとしまきの過ぐる刻を待つ  
盃満たしカウントダウン去年今年  
凍つる道助走で滑る登校児

新潟 高橋 ひろ

初読経感謝万人万物へ  
有り合はす葉物刻みて七日粥  
新雪と云ふ雪玉を持たさるる  
煮凝へ口近付けて啜りけり  
咳のあと落ち込むやうな眠気来る

新潟 高野 松風

何ごともなく眼鏡拭くお元日  
御降りやはや小さき子の靴のあと  
二三日鴉うなづく御慶かな  
盲選といふ言の葉の初句会  
冬桜百人目とや予約本

益子 光岡 れい子

切干のちりりと乾く日差しかな

おしやべりの指は糸糸を意のままに  
元日やきりりと今朝の遠男体山  
『よだかの星』声出して読む三日かな  
なづな粥二人で食ぶるめでたさよ  
糸電話の内緒話や石路の花

芳賀 大村 かし子

弟の挨拶メール去年今年  
窓の雪卒寿の酒の染み渡る  
棲み着きし鳩に米撒く雪の朝  
全身に初日を受くる卒寿かな  
くつきりと筑波二峰に初明り

宇都宮 阿久津 勝利

舞妓さんと投扇興に遊びけり  
川波の光を纏ひ浮寝鳥  
大銀杏落葉に影を落としいけり  
寒暁や新聞受けに音ひとつ  
音閉ざす三百尺の氷り滝

栃木 上岡 佳子

賀状書く昭和の歌を聴きながら  
初詣済めば名代のラーメン店

寒晴や日光連山迫り来る  
雪月夜庭一面の仄青さ  
着膨れて回りきれずよ陶器市

佐野 増田 幸子

寒靄の雫きらめく羅漢像  
星ひとつふえ月影の三日かな  
カシミアのピンクのセーター買初に  
赤松の下枝さゆらぎ初雀  
大寒のきままな雲の流れかな

佐野 加藤 季代

寛げるとくに崩れ焚火の火  
元日はウイーンフィルと珈琲と  
妣の歳超えてめくるや初暦  
香を放ち色を放ちて寒紅梅  
寒の水飲みてひと日の始まりぬ

佐野 阿部 澄

救急車の音の遠きや落葉掃く  
一袋の堅炭のこし逝きし夫  
御降りや急勾配の梯子段  
どんど焼干支の土鈴の燃え残る

初句会達者な顔の揃ひたる

佐野 芝宮留美子

冬晴や皇帝ダリア色失せる  
蓮枯れて沼のかたちのあらはなり  
風少し早梅の緋のゆるびたる  
何もかも消ゆる山里冬の霧  
きりのなき子のしりとりにや冬の虹

佐野 島田 和枝

富士山を見る城跡よりの初景色  
初雪の庭に降りたつ大鴉  
幾万の冬芽眠れる森しづか  
御降りの雪となりたる朝かな  
天をさすメタセコイアの淑気かな

佐野 売野 緑

旅客機の音の遠のく袖湯かな  
歳晩や予防注射の肩痛む  
初日の出筑波二峰を輝かせ  
浅緑の萼に白梅咲き初めり  
米を研ぐ七草の名を諳じつ

佐野 店 網 洋 子

枝々に夜雨のしづくクリスマス  
白鳥の親子一列沼青し  
元朝や諸手をあげて深呼吸  
初神籤水に吉の字浮かびけり  
雪晴や霏立ち上る筑波山

足利 大 木 茂

空つ風絵馬が絵馬打つ札所寺  
御降りやはや黒土に湯気立ちぬ  
音絶ゆる速夜に細き冬の雨  
嶺の雲焦がす火球や初旭  
雲一朵無き坂東の大枯野

土浦 澤 照 枝

大風車浦みはるかす淑気かな  
書初の朱を入るる師の皺の指  
雪だるま人参の口大笑ひ  
炭の眉へのへの太き雪だるま  
出初式の一斉放水浦に虹

加須 茂 木 弘 子

底冷えの土蔵にずらり菊花石

枯野原奥に仄かな街明り

間伐の音や社の年用意  
初声の大鷲嘴を半開き  
露天湯に仰ぐ昼月四日かな

きま 山 本 右 近

生きるとは老いてゆくこと初鏡  
鉄塔の影を伸ばして冬落暉  
とんとんと七草粥の野の香り  
焼藪の袋に洛中洛外囃  
霰降る路地に祇園の灯の小さし

所沢 三 好 か ぼ る

富士見ゆる街に住み古り松飾る  
梅早し社の藁の馬なでて  
子との旅先づ記しけり初日記  
たをやかな百済観音日脚伸ぶ  
回廊のまろき柱に春きざす

所沢 南 雲 秀 子

年の賀の大袋提げ家路かな  
同胞と話のはづむ三日かな  
今盛るわが家の歴史寒椿

買初の夫の動かぬ蟹売場  
トンネルを抜くれば秩父雪残る

千葉 田中 道江

良きことは小さきことや葛湯吹く  
対岸のビル影揺れて鴨ゆれて  
大初日芥ひとつだに無き川面  
本殿まで冬芽の枝垂桜かな  
日向へとポール転がる三日かな

千葉 松浦 陵保

みちのくの民謡酒場爛熱し  
対面の句会宜しき小正月  
パビリオン跡地に映ゆる冬桜  
寒風や芭蕉の句碑の凜と立つ  
梅蕾む天満宮の奥の院

千葉 喜多 恭仁子

千葉開府九百年目のお元日  
唇にオカリナひやり初稽古  
獅子柚子のジャムたつぷりと四日かな  
阪神忌ふるさと神戸に妹ひとり  
枯菊を束ねて見上ぐ空真青

千葉 大月 玲子

悴む手包んでくるる悴む手  
寒晴の富士一筋の道ありぬ  
あらたまの光を纏ひ雲一朶  
身ほとりの物みな影に寒の月  
ピアソラのタンゴ流るる女正月

佐倉 大内 佐奈枝

初暦先づは表紙の一句より  
初乗の車窓に探す遠筑波  
焚火の輪産土神さまに尻向けて  
水さつとかけて俎始かな  
青慈姑勾玉に似て翡翠色

佐倉 三屋 英俊

夜話や山姥外にゐる気配  
東雲の影ろふ海の淑気かな  
きらめきは波の小躍り初日さす  
笄する杣の鉞おと樵初  
翳す刃のきらりと手斧始かな

佐倉 横川 良子

冬空の圧倒的な青さかな

等分に羊羹切るや去年今年  
荒行の声の届けり竜の玉  
寒波来る復興未だ地震の街  
寺由緒の薄れし文字や寒椿

四街道 奥 太 雅

家中の蒲団を干して子等迎ふ  
御降りの屋根に耀ふ朝日かな  
対訳の枕草子読初に  
棟瓦スキップで翔つ初鴉  
本棚に積もる埃や去年今年

四街道 塗 木 翠 雲

霜除に被せてありぬ新聞紙  
歳晩のセールに並ぶ夕まぐれ  
初雀こぼれ米食む精米所  
初日上ぐ波穏やかな九十九里  
父が搗き母が捏ねたる鏡餅

船橋 山 下 良 江

今年またいつもの故里雑煮かな  
初詣社の杜の暗さかな  
涸池に鴉ひと群羽繕ひ

大木の覆ふ階段初詣  
初詣の列石段を下り上り

船橋 久保村 淑子

寒風やぎしぎし軋む大櫓  
弾みてはいよよふくらむ寒雀  
チューバ吹くポニーテールや室の花  
寒風や救急車また曲がる路地  
田へ続く木橋で写真成人祭

船橋 片 桐 帆 一

房総の山並み遙か年惜しむ  
雨樋をかたかた言はせ初雀  
そば蔵の格子窓より冬日失せ  
床に聞くラジオの談志二日かな  
初夢や蕎麦屋の奥に良太さん

船橋 宮本 加津代

短日を器用に捌き老庭師  
年越の蕎麦をすすりて一人かな  
氏神の中はからつば梅日和  
臥す友に一匙なりと七日粥  
また一戸空き家の増えて枇杷の花

船橋 中嶋 久登

冬の海日付變更線越ゆる  
寒潮の行く先知れぬ速さかな  
門松の切り口に脂固まりぬ  
船上のカウントダウン年新た  
痛きほど真直ぐ船に初陽かな

柏 山本とく江

独り居に鐘の余韻や去年今年  
水仙や庚申塚に絵馬一つ  
師の句集懇ろに練り年惜しむ  
鑑真の御目にも触れ風花す  
御仏の庭のせせらぎ寒の水

柏 内田 郁代

いとこ煮もお菜に付けて冬至の餉  
机上には歳時記ひとつ去年今年  
お座敷の陽射しふくふくお元日  
屠蘇散の香り満ちたる厨かな  
初夢を思ひ出せず一日過ぐ

柏 古川 京子

凍星の頬さす道を帰りけり

梟は眠れり杜に日の昇り  
犬吠埼の逆白波へ御慶かな  
初春の陽光ふふむ筆の墨  
あらたまの闇を抱きて杉木立  
流山 穂 莉 照 子

地に還るものゆるやかに去年今年  
樑やまた裏返す砂時計  
鳥跳ねて光のばねとなる冬木  
星を呼ぶやうに梟啼きにけり  
これよりは仏の庭や梅早き  
松の葉にきらきら刺さる寒の雨  
市川 奥澤よし江

集まりに遺影の笑みも年新た  
ためらひつ小さき手を出すお年玉  
書初の墨たつぷりや左利き  
大寒やシューズの紐をきつく締め  
疇へとひと声残し寒鴉

東京 名和 政代

初曆卒寿祝ひのシール貼る  
京ちりめん七種粥のトッピング

水仙花東尋坊の波しぶき  
碇泊の船窓越しの鏡餅  
小屋掛けの門松売りの声透る

東京 藤田裕子

かの日にはここに父の座お元日  
読初は米寿の句集空真青  
一段と減りし賀状や八十路越え  
新しき土鍋は小振りなづな粥  
俳句手帳あらため今日の初句会  
ゆるゆると夕餉の仕度日脚伸ぶ

東京 加賀葉子

堅き音とぎれとぎれや羽子日和  
鏡割かけら余さず笹に干し  
彫りうすき手の平ほどの踏絵かな  
長崎の坂のだらだら着ぶくれて  
待春の庭に野鳩のふくらめり

東京 久留島規子

初富士を拝むしあはせ年女  
早起きに急かされて焼く雑煮餅  
未だ来ぬごみ収集車寒の入

高台の内も拭き上げ雑煮椀  
松取れて人のあふるる診療所

東京 岡村純子

凍つる夜に一点強く光る星  
門前に一叢開く黄水仙  
一段と尖る寒さやバスを待つ  
リビングの奥まで明し冬満月  
袖子の木の枯れに明るき実の一つ

東京 桑原優美子

日脚伸ぶ路面電車の走る街  
白き息吐きアンカーの孤独なる  
宙吊りの肉にスタンプ冬日差す  
大寒の夕日を玻璃に大学棟  
初晴の空の高さや大気吸ふ

東京 三村紀子

年女亭主となりて初点前  
初旅のトンネル抜けて銀世界  
薄氷をつついては飛ぶ鴉かな  
先頭で泳ぐ真鴨に迷ひ無し  
広がりてまた固まりて堀の鴨

東京 小池 清晴

菊坂の火伏稲荷や実南天  
交差点犬と駆け出す息白し  
冬至梅根元に落ちし籤は吉  
居酒屋にのれんの下がる四日かな  
手術後のポインセチアの赤の濃し

東京 一由久美子

鷹匠の声透き通る御苑かな  
疑似餌振り呼べど大鷹戻らざる  
潮入の水門閉づる寒の入  
引き継ぎし印半纏どんどの火  
羅漢さま烟らせてゐるどんだかな

武蔵野 松井 宣夫

カート押すところと花野菜  
路地裏に障子を洗ふ親子かな  
「ご自由に」山門前の仏手柑  
組板を削り終へたる年の暮  
マーカーで師の句をなぞる初曆

町田 広瀬 俊雄

丹沢山の肩にかたぶく雪の富士

今年また友の賀状の減りにけり  
左義長の終はりし跡の黒々と  
阿夫利嶺に雪の降りたる朝かな  
朝の陽に崩れ輝く霜柱

町田 桔梗 純

注連飾買うて主のひと仕事  
雪しづるひかりの中の初詣  
注連納藁のかをりのそこはかと  
寒晴や銀杏大樹へ鳥しきり  
寒夕焼丘の館の影絵めき

日野 喜多尾 明子

初電車見返る窓の富士ましろ  
菜屑のせ暗渠へ吸はれ冬の水  
やはらかき雨の来てゐる冬菜畑  
冬夕焼雑木の梢ととのひて  
鉛筆の芯また折るる寒さかな

横浜 西本 才子

産土の丘に拝めり初日の出  
堰に来て飛沫の高し寒の入  
大寺の香炉に炭団足されたり

薄紅のままに枯草膝の丈  
冬暖日もすがら玻璃きらきらと

横浜 大橋 雅子

故郷の雑煮白味噌たつぷりと  
寒鴉もどり来りし森の空  
冬ぬくしクッキー瞬時の袋詰め  
商店街パンジーの鉢店毎に  
首縮め中州に眠る鴨の群

横浜 三木 豊子

起き抜けの喉沁み透る寒の水  
しぐるるや昼の蕎麦屋に相席す  
釣人の動かぬ影や冬帽子  
昨夜の雨残る石垣石露の花  
枕辺に除夜の汽笛の届きたり

横浜 星野 信子

初春や神馬柵より顔を出す  
大波の寄する漁港や冬かもめ  
日の差して氷柱のしづく土を打つ  
それぞれに虫の命や冬銀河  
丸餅の醤油仕立てと味噌仕立て

川崎 大久保 進

煤逃や二つ返事の友誘ひ  
初春や埃をはらふ去年の計  
生かされて紡ぐえにしや福寿草  
春待つや枝に御籤の固結び  
二八蕎麦仕上げにさらす寒の水

鎌倉 恒川 清爾

冬ざれや小さき踏絵のくすみたる  
Lサイズのカップに珈琲寅彦忌  
新年を球子の富士と迎へけり  
四日かなパンにバターをたつぷりと  
七日粥家族一同下戸ばかり

伊勢原 佐藤 和子

下戸の父上戸の兄やしよつづる鍋  
霜柱踏んで柩を担ぎ出す  
お手玉を袂に二つ春著の子  
釣具屋に夫の長居や松の内  
青竹のぷしゆと息吐くどんど焼  
寒釣の二人餡パン分け合うて

静岡 大村 峰子

掃初の塵の一つに御飯粒  
笹山へ放り出されし冬の月  
テール掛け背に男の子の聖夜劇  
流星群見むと綿入引つ掛けて  
梟に産土の闇動きたる

静岡 宮崎 知恵美

墓に来て翅をたたみぬ冬の蝶  
寒芹の水の流れに根をさらす  
落葉掻く掻いては風に散らさるる  
石落咲くや宿に赤子のよく眠る  
今は亡き匂友の畑の冬桜

静岡 望月 敏男

城垣の冬蒲公英の真つ黄色  
ペンギンはいつも礼服お元日  
ドローンのエンジン音や山眠る  
初場所や力士の背に指の跡  
高々と足踊らせて初芝居

静岡 藤原 千代子

片端は冬の霞に三保の松

朱に染まるビルの樹海や冬落陣  
仏壇に話しかけては煤払  
注連飾る農機三台磨き上げ  
富士を誉め書を誉め女礼者かな  
待つといふ幸せのあり冬木の芽  
初山河未來は今を積み重ね  
祈るほか無きこと祈る冬銀河  
大寒や波の切つ先雲を刺し  
一月の光棲みつく松の枝

静岡 荻野 加壽子

幸先詣おでんの匂ふ路地を抜け  
煤逃の後円墳の頂に  
真つ白な禪師の像の悴めり  
境界の幣の湿りへ太鼓冴ゆ  
板塀に跳ねし泥跡寒旱  
石垣に数多の楔冬の蝶  
風に乗る球児の声や枯野原  
葉ぼたんの縮緬皺に雨の粒

静岡 小川 明美

静岡 藤本 節子

卷きぐせを幾度もなだめ初曆  
懐しき癖字のままや年賀状

静岡 大長 文 昭

腰入れて開く大戸や年の暮  
冬ざるる遊女の墓は河原石  
掘抜きに山と積みたる根深葱  
赤福の赤きかまどや福沸  
初明り半島の先深眠り

静岡 加山 ひさ子

十能に運ぶ炭火のあかあかと  
お三時や口尖らせて葛湯吹く  
寒四郎うからやからに肉を焼く  
さくさくと大根刻む割烹着  
冬耕の鋤を洗ふや夕迫る

静岡 石川 裕 子

煤掃や納屋に積み置くブリタニカ  
鯛焼のぬくもりひとつ仏にも  
庭の松一枝加へ掛飾  
重箱も椀も輪島やお正月  
青竹を流るる手水初詣

静岡 本多 ひとみ

朝時雨松原越しの波の音  
細波の沼面に潜る鳩  
鶯発つや冬日眩しき沼の面  
冬うらら埴輪の笑みに笑み返す  
土乾く登呂田に一打鋤始

静岡 杉 澤 修

タツクルを躲し冬日をひた走る  
寒風へ怒濤のトライロスタイム  
影と影連ねラグビー果てにけり  
ガジユマルの鉢に水遣る四日かな  
松七日過ぎてととのふ文机

静岡 松 永 博 子

眠る山背に古墳の横たふる  
賽銭のスマホ決済実千両  
相槌を夫に打ちつつ薺打つ  
富士塚の石段登る初鴉  
かんざしの珊瑚の珠に冬灯  
餌場まで白鳥編隊を解かず

射水 成瀬 真紀 子

白鳥の暮色遠嶺の夕茜  
買初の時計我が生刻み初む  
星洗ひあげて寒九の雨上がる  
小豆粥能登塩に味引き締まる  
冬將軍けものの声の風連れて

金沢 今越みち子

裏白へ川のしぶきや比咩の宮  
我が干支の布の蛇手に年惜しむ  
日めぐりに兜太の俳句今朝の春  
思ひつく句を並べ書く初日記  
嫁が君留守の我が家へしのび込み

金沢 伊藤美音子

小楸紗におうすのみどり親鸞忌  
独りより二人またよし日向ほこ  
備長の火に自然薯のひげあぶる  
乳母車銀杏黄葉に押し出しぬ  
一心に爪研ぐ猫や石路の花

金沢 高田たみ子

一本の深き靴跡今朝の雪  
献上の餅高高と初社

雪起しどすんとひびく寝入りばな  
両の手のかほそき枝や雪だるま  
ばたばたとこなす一日おでん鍋

金沢 豊田高子

相槌や火を手なづけて鍛冶始  
知恵熱の赤子抱きしめ初日受く  
畳替這ひ這ひの影新しき  
鱒酒や米寿の夫の節くれ手  
手に触れて赤子高ぶる初鏡

金沢 松井佐枝子

薄墨の空東の間の時雨虹  
急湍に乗り身構ふる番鴨  
元日やすずろありきに師の墓前  
とんど終へ縄黒黒と固結び  
ふるさとを歌うて締むる初句会

金沢 石川純子

茶柱に吉と占ふお元日  
朝の鳥はばたき散らす松の雪  
探しゐて忘れぬし物出る三日  
わが札と競ふ一枚歌かるた

冬ざるる大往生なる熊の皮  
竹林のざわめく空や冬の月

金沢 河野尚子

積ん読の一書取り出す冬深し  
削らるる齒に火の匂ひ返る  
ティンパニのひびく一打や鯨起し  
金粉の僅かにゆるる年酒酌む  
抱き上げて猫の爪きる二日かな

金沢 道場啓子

走り根に足をとられて初詣  
同姓の多き界限花八手  
雪晴や追越してゆく若き脚  
わが彫りし石仏在す寺もみぢ  
師の句集閉づれば窓に枯葉降る

金沢 杉本年虹

極月や盤持石にはや翳り  
だんまりも生きる方便枯柏

※盤持石……力石のこと

ひいふうと塀の外より羽子の音

緑青葉六箇二句や日本武尊の像返つる

梅日和擲手門の野面積

短日の尖りてゐたる鳥の声  
寒に入る鉛瓦の煌めきて  
獵犬の風の動きを聴きゐたり  
花柄のかるきスリッパ春を待つ  
春隣駈け出しさうな馬の文字

金沢 南恵子

竹林を渡る風音雪もよひ  
蒼穹ゆ枯野へ鳶の急降下  
村しぐれ草木を我を洗ひ過ぐ  
尼寺の庫裏の灯や霜のこゑ  
歌かるた一人読みをり誰も来ぬ日

金沢 松下信子

観音へ響く御詠歌煤払  
金屏風お座敷太鼓の音弾む  
実千両添へて出さるる加賀料理  
菱槽隠す放水出初式  
風花す遊女寄進の石灯籠

金沢 北川禮子

御降りや鎮もる町の黒瓦

金沢 清水英理子

人日のジムに流るるマイウエイ  
肌の艶褒め合うてをり女正月  
待春の光を画布に筆弾む  
大寒の奥の間人を寄せつけず

金沢 松田好子

御降りや白一色を纏ふ街  
師は空の星かと見上ぐ初昔  
竹四本立てて畑中どんど焼  
冬落暉書を読む夫のまろき影  
煮凝をすすり浮かびぬ笑みの父

金沢 井端久子

むらさきの風呂敷を解く札納  
寒行へ脱ぎし草鞋を揃へけり  
水行の肝文雪を震はせり  
弥陀仏を摸るやうな煤払  
板戸打ち峠の茶屋の冬構  
石路の花黄のほのど徹の句碑

※徹…林徹(俳人)「遊」創刊主宰  
七尾 谷渡末枝

熊撃ちの段取り夜の更くるまで  
山神へ熊の腑分けの肋骨

水雪に暮るる能登路の行き止り  
大白鳥湖翔つときの水柱  
迂闊にも七草粥の鍋焦がし

白山 加藤美栄子

御慶かな耀ふ白山真向ひに  
白銀の山河眼下に初滑り  
ひと杓の若水ふふみ杜氏継ぐ  
一幹へ振り上ぐ光り初手斧  
枕辺に唸る除雪車三日はや

敦賀 倉谷ます美

寒桥の音揃はせて青年団  
煮凝は考の好物酒添へて  
露こほる峠を急ぎ見舞ふ朝  
紅藻岩幾重に流れ冬の滝  
一息に海鼠仕留むる伊勢の海女

敦賀 薨田勝子

木地師住む漆畑の露こほる  
信濃路に熊を追ひやる猟銃音  
匂ひ立つ松の競り市年の暮  
お砂踏み終へて清しき冬桜

職退きて日がなまつたり海鼠舟

敦賀 中川 雅月

露こほり静まる寝間の息遣ひ  
火の番や拍子木打ちて裏通り  
酔海鼠の映ゆる器や伊万里焼  
百歳の年の違ひや晦日蕎麦  
浄土寺檀家総出の除夜の鐘

敦賀 中村 優

八卦見や悲喜交々の年の暮  
腹割けば塩に振るる海鼠かな  
ひそひそと冬薔薇の芽の艶めけり  
煩惱のひとつ増えたり初昔  
雪しまき一乗谷の迷路めく

敦賀 為永 香月 枝

年の暮雨の清めし朱の鳥居  
手をたたき龍呼ぶ寺や片時雨  
上加茂の社家の漬け込む酢莖かな  
過去形の多き会話や年の暮  
晦日蕎麦夫の在所の手打かな

徳島 福島 吉美

回廊の落葉掃きだす棕櫚箒  
揚げられて鶺鴒舟重なる草紅葉  
秋の宴即興で舞ふ白虎隊  
百の柚子投げ込む里の露天風呂  
山茶花の一輪開く退院日

徳島 村上 和義

箸差せば餡のとろける雑煮餅  
盆栽に水遣るだけの三日かな  
つぎつぎと飛び立つ鴨や水脈重ね  
粉雪を眉毛に留め野良仕事  
象の鼻縮かんでるし寒の入

徳島 宮西 修一

街路樹の瘤隆々や冬ざるる  
着ぶくれて犬に引かれてゐたりけり  
日溜りの軒にふくらむ寒雀  
初売へ鉦を振る人並ぶ人  
ほろ酔の妻に従ふ女正月

徳島 平岡 功

夕暮の花街に舞ふ雪螢

隠沼の風まかせなる浮寝鳥  
星座めく花柵の散りし路地  
枯蓮の千の矢の中こふのとり  
花屋今赤の溢るる十二月

石井 木内 マヤ

箆に寝る猫はまん丸年越せり  
冬日濃し猫の瞳の縮こまる  
初句会塩たつぶりの茹で卵  
風邪の子と過ごす小部屋の明り窓  
いい風が吹きますやうに初御空

小松島 岡田 あゆみ

鐘楼にすつぽりはまり煤払  
東屋に碁石打つ音小六月  
大根の穴に輝く昨夜の雨  
小説を売つてまた買ふ十二月  
冬帽子被せてありぬ芭蕉の碑

松山 入河 大河

太陽の賜物鉢に福寿草  
鷹揚に重なる葉より枇杷の花  
冬天へ堅くそばだつ一本松  
床の間の深き色合ひ海老飾る

ほんのりとつやめく指に蜜柑剥く

福岡 宮田 千恵子

遠近の山のまどろみ冬霞  
朝風呂に文旦の皮香りたつ  
きれながの埴輪の馬の目に初日  
すすりあげ面ゆるびし齋粥  
登り窯けぶりて山は冬紅葉

長崎 丸本 祥夫

紫の炎となれり牡丹楮  
着ぶくれの釦の一つ転がれり  
地を這うてまた飛び翔てり冬の蝶  
硝子戸の乾びし音や冬の雷  
初弥撒の扉を開くる束の鍵

西海 山下 敦子

母逝きし日の如小菊乱れをり  
冬霧や通学船の汽笛長  
大寒に似合はぬ丸き雲ひとつ  
水仙の向かうを浪のしぶきかな  
春隣さざ波もなき大村湾

宮崎 中山 宣

年の市まづ鏗節の品定め

黒潮の潮目藍いろ初景色  
七草の青濃き香り伊賀土鍋  
凍星知覚特攻基地跡や三角兵舎の豆電球  
目の神へ急な石段春浅し

宮崎 中山 芳 教

瑠璃を這ふ一途な流れ冬の雨  
積む齡餅小刻みに薺粥  
氣鬱なる術後の朝去年今年  
凍窓に星の声聴く夜半かな  
冬北斗連れ退院の車窓かな

宮崎 鳥居 達 史

権禰宜の白足袋罷る破れ畳  
山眠るかりこ※かりこはうず……西米良村に伝わる精霊  
付箋垂るる妻の家計簿小正月  
西郷セニどんのゆかりの湯宿梅白し  
朽ち小屋に茶の花こぼれ開墾地

那覇 中 本 清

元朝の無限の闇を脱ぐ久高島  
海蛇の初潮上る夕まぐれ  
春を見に蔡温さいおん墓地を遠回り  
巻貝の歩む白砂※蔡温……琉球王国の最大の政治家へ初明り

枝々に夕日遊ばせ啼く梟

那覇 辺野喜宝来

鳥影や浦の水鳥寄り合へる  
裏紙に記す一句や日短  
初鶏の声よく透る首里の闇  
この島に老いて若水ふふみたり  
御降りのほどよき音と杳の音

西原 宮 城 勉

まほろばの天地つなぐ鷹の声  
生滅の星星孕み冬銀河  
辞書・付箋位置を正して読始  
棚引くはあけづ御衣※御衣……あきつ羽のように薄い美しい御衣(おもろ古謡)かや初霞  
一合を余す夫婦の七日粥

ベルン 鈴木 波 江

掃初は小箒にはく猫の砂  
気合ひ入れて生きよと夫が初夢に  
句紡ぐ蕪を煮る火をほとほと  
縫ひぐるみ唾へて共寝かまど猫  
厨房が常なる居場所室の花

# 同人作品の佳句

江見悦子選

廃村の枕木の果海凍つる  
音閉ざす三百尺の氷り滝  
屠蘇散の香り満ちたる厨かな  
地に還るものゆるやかに去年今年  
ゆるゆると夕餉の支度日脚伸ぶ  
羅漢さま烟らせてゐるとんどかな  
初春や埃をはらふ去年の計  
寒釣の二人餡パン分け合うて  
梟に産土の闇動きたる  
まき癖を幾度もなだめ初暦  
影と影連ねラグビー果てにけり  
白鳥の暮色遠嶺の夕茜  
寒行へ脱ぎし草鞋を揃へけり  
木地師住む漆畑の露こほる  
ほろ酔の妻に従ふ女正月

佐藤 哲

阿久津勝利

内田郁代

穂苺照子

藤田裕子

一由久美子

大久保 進

佐藤和子

大村峰子

藤本節子

杉澤 修

成瀬真紀子

井端久子

鶴田勝子

宮西修一

## 謹告

下嶽孝一氏しもたけこういち（同人・東京）は、1月7日にご自宅  
で倒れられ、1月10日に搬送先の病院で急逝されま  
した。享年83歳。

同人となられた平成30年以降、「万象」誌の校正担  
当として目配りの利いた仕事をされ、東京支部支部長、  
新中央旬会司会者としてもご尽力をいただきました。

また、オンライン同人旬会にも意欲的に参加され、  
洒脱な句や、奥行きを感じさせる句をものされたこ  
とは誰もの記憶に残るところです。1月の同旬会で  
は、投句した3句すべてが取られて最高点句となつた、  
そんな矢先の出来事でした。これらの3句を掲載して、  
これまでのご労苦を謝し、謹んでご冥福をお祈り申  
し上げる次第です。

呼び鈴に庭から返事して師走

袖子風呂や受けし赤子の蒙古斑

山眠るねむらぬものの襲ふ里

万象俳句会

「万象」編集部

谷廣司氏たにひろし（同人・札幌）は、ご療養中の  
ところ令和8年1月27日逝去されました。享  
年76歳。

新同人として、また北海道支部の柱として  
益々のご活躍を期待しておりました。残念で  
なりません。

蝦夷松の太枝撓ふ昨夜の雪

「新同人競詠」（令和7年4月号）より  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます

万象俳句会



同人会だより

俳句と共に五十年

山本とく江

昭和48年、子供の中学校入学を機に東京から柏市へ転居しました。その頃偶然に「風」同人だった兄が来泊し、強引に勧められ「風」に入会する羽目になりました。当時、千葉県には句会がなく昭和51年に「風」の編集長だった宮岡計次先生のご指導の下に、参加した7人で千葉句会が発足しました。

以来、全国各地での大会や鍛錬会に参加して、視野が広がり、自分なりに俳句の楽しさや無限の奥深さが、少しずつ解ってきたように思います。

その頃は勤めており、休みを取るのに大変苦労をしながら、山田春生先生指導、内藤恵子幹事の奥の細道吟行会（一泊二日のバスツアー）で、全行程を踏破しました。更に登山吟行や吟遊会など楽しい記憶が蘇ります。

平成2年、同人になると同時に発送係に加わり、晩年の沢木欣一・細見綾子両先生と身近に接する機会にも恵まれ、四国遍路も忘れられない思い出です。

「万象」になつて寂しさを感じながらも、大坪景章先生に序文を頂き句集「結願」（沢木先生が印刷直前まで編集してくださった）を出版出来、句会の皆さまのお陰で開かれた出版記念会の感激も忘れられない事でした。

「風」から続いた発送係を終え、自分の人生を振り返り、まさに俳句に生かされた五十年だと思えます。

2月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

- |   |                  |       |         |
|---|------------------|-------|---------|
| 9 | 靡かざる力ありけり蓮の骨     | 穂苅    | 照子(流山)  |
| 8 | ただならぬ世のただならぬ雪の嵩  | 小林    | 愛子(横浜)  |
| 7 | 春を待つ日に一便の連絡船     | 中條    | 睦子(金沢)  |
| 6 | 春立つやキューピーの背の小さき羽 | 神田美穂子 | (静岡)    |
| 6 | 今日もまた修行のごとく雪を掻き  | 清水英理子 | (金沢)    |
| 6 | 白き息吐いて真つ赤な嘘をつき   | 中村    | 千久(志木)  |
| 6 | ちやんばらのつららきらら登校児  | 喜多尾明子 | (日野)    |
| 4 | 吹雪く夜や鏡の奥を雪女郎     | 小林    | 愛子(横浜)  |
| 4 | エンドロール襟巻きゆるく巻き直し | 中條    | 睦子(金沢)  |
| 4 | 大寒の背中に触るる聴診器     | 南     | 恵子(金沢)  |
| 4 | 畦道は足裏にやさし犬ふぐり    | 佐藤    | 和子(伊勢原) |
| 4 | 湯がたぎり深雪の国の手毬唄    | 小林    | 愛子(横浜)  |
| 4 | 下萌や青き地球をなほ青く     | 平岡    | 功(徳島)   |
| 3 | 木の芽張る千手のやうな枝の先に  | 中鉢    | 弘一(札幌)  |
| 3 | 残照や流水朱にも碧にも      | 中鉢    | 弘一(札幌)  |
| 3 | 寒明の僧満願の達磨髭       | 三屋    | 英俊(佐倉)  |
| 3 | パンダ去ぬる上野の森の余寒かな  | 柳澤    | 宗正(横浜)  |
| 3 | 小便小僧尿に二月の光かな     | 古川    | 京子(柏)   |
| 3 | 露の壺縄文土器片持ち上げて    | 谷渡    | 末枝(七尾)  |
| 3 | 大寒や乙女瀑下に印を切り     | 三屋    | 英俊(佐倉)  |
| 3 | たみ来る波の大小春立てり     | 佐藤    | 和子(伊勢原) |
| 3 | 寒月光まとひ好漢逝けるとは    | 江見    | 悦子(東京)  |
| 3 | 枝から枝へ走る鳥影木の根明く   | 沢辺たけし | (千葉)    |
| 3 | 史話伝ふ沖の島々初霞       | 大木    | 茂(足利)   |
| 3 | 白息をぎゆうぎゆう詰めに山手線  | 佐藤    | 和子(伊勢原) |
| 3 | 日向ほこやさしい嘘をつくことも  | 岡村    | 純子(東京)  |

(\*句頭の数字は点数を示しています)

2月は「万象俳句会年会費」の「納入月」です  
ご理解とご協力を宜しくお願い致します。

会員・同人の皆様へ

- ① 「万象」俳句会の会計年度は、4月1日～翌年3月31日です。
- ② 振込用紙は、毎年「万象」誌2月号に挿入してあります。振込用紙を紛失された場合は、郵便局備付けの振込用紙をご利用下さい。
- ③ 振込みは郵便局窓口、又はATMからお願ひ致します。
- ④ 振込み締切日は2月末日です。2月末日までに振込みをお願ひ致します。
- ⑤ 2月末日までに振込みが無い場合は、4月号以降の配本を停止させて頂きます。
- ⑥ 振込先は、郵貯振替口座番号【00230-0-103581】  
口座名【万象俳句会】です。
- ⑦ 会費は、前納制で一年分をまとめて振込みをお願ひ致します。
- ⑧ 金額は、  
一般会員 一、〇〇〇円です。  
同人会員 二、〇〇〇円と同人会費三、〇〇〇円の  
合計二七、〇〇〇円です。
- ⑨ 振込み頂いた会費は、原則として返金致しません。
- ⑩ 振込用紙の半券(控)を「領収書」と致しますので、大切に保管をお願ひ致します。
- ⑪ 振込手数料は「ご本人」負担とさせて頂いております。
- ⑫ 同人会費(三、〇〇〇円)は、後日、同人会会計口座へ纏めて振替えます。

万象俳句会 会計担当 松浦 陵保  
万象同人会 会計担当 小池 清晴

毎月25日発売  
定価1000円(税込)

# 月刊 俳句界

2026年 4 月号

**「俳句界」投稿欄**  
一流選者10名！  
充実の投稿欄

**特集**  
小林一茶200周年特集  
一茶の故郷・信濃町  
『七番日記』落札の裏側  
インタビュー 渡辺洋(一茶記念館館長)

**賞詠**  
井上裕太 川越歌澄 堀本裕樹  
高勢祥子 涼野海音 藤井あかり  
坂井諒一 西村麒麟 堀切克洋  
北賞 諏佐英莉 藤原暢子 西川火尖  
受賞者 伊藤幹哲 佐々木紺 若林哲哉  
古田秀

**特集** 俳句の可能性  
「アートを生かした企業研修」  
須藤修司・良子(パロールラボ合同会社代表)

**シリーズ** 推薦！注目・期待する俳人⑤  
丹野剛紀 三角尚子 木村定生  
安藤文 小林史於

セレクション結社「からまつ」石川豊実  
池田瑠那(祝！第40回俳人協会評議新人賞受賞)

句集『心柱』  
評論集『境目に立つ、異界に坐す』  
評論集『境目に立つ、異界に坐す』

**連載**  
宮坂静生 青木亮人 林誠司  
石井隆司 若林哲哉 広渡敬雄  
坂口昌弘 八田九郎

※一部変更の可能性あります。

お求めは●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

# 佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(二月号)

神田美穂子

身ほとりを即かず離れず雪螢 紅露恵子

晩秋から初冬、気がつけば目の前に現れる「雪螢」。ことに夕暮れに見るあのほの蒼さには、何か心惹かれるものがある。作者は即かず離れず漂う雪螢に親近感を覚え、そこに父や母や親しい方たちの面影を求めたのかもしれない。

朝まだき凍て道急ぐ黒き影 太田佳美

温暖な地に住む者にとつて残念ながら「凍て道」というのはあまり実感が無い。夜の明けきらぬ凍った道を急ぐ人々を黒き影と表現し、一読モノクロの世界が広がる句となった。

白鳥来水面たちまち生き返り 光岡れい子

「白鳥」はその名のとおりに全身真っ白、その飛翔の美しさや水面に浮かぶ姿のよさは古来特別な存在である。その美しい白鳥が着水するやいなや、水面はたちまち華やぎ、生き返ったように特別なものとなったという。そう直感した作者の豊かな感受性に共感できた。

銀翼の音を置き去り鱗雲 上岡佳子

要約すれば飛行機が音を残して鱗雲の中に消えて行った、という事であろうが、これを詩的に表現すると、掲句のようになる。俳句は詩である。見たままの表現では俳句にならない。見たままではなく詩として昇華させてこそである。

信濃柿しだるる枝に押し合ひて 芝宮留美子

「信濃柿」は野生の柿で、果実は小さく日本では古くから栽培されている。熟せば食用となるが元来は渋柿である。その実が枝に押し合うようにびっしりと生っている。見たままに素直に写生されている。昨年はそのような柿を狙って熊が出没し、多くの被害が報告され、市町村から補助金が出て伐採された。この柿もその対象になったのかもしれない。

小春日や触るる墓石に師の温み 山本とく江

この句の師とは沢木欣一、細見綾子。作者は「風」「万象」で長い間発送業務を担ってこられ、風木舎にもたびたび足を運ばれて貢献されてきた。昨年の「万象」全国俳句大会の翌日、「風」時代からの句友とともに沢木家の墓を訪れた。墓石にそっと手を触れて、在りし日のお二人を偲べたのである。「墓石に師の温み」に久しぶりに句友と墓参し、手に伝わる小春の温もりに、師と心の中で会話できた喜びが伝わる句となった。

新蕎麦やにはかに冷ゆる山下る 古川京子

蕎麦好きは「新蕎麦」の季節は待ち焦がれるものらしい。西日本はどうん文化だが、東日本は蕎麦の文化。都会の昔ながらの名店はもとより、不便な山奥にある素朴な蕎麦屋も人氣があり、予約不能の店や行列のできる店がある。かねてより評判の、或いは行きつけの鄙びた蕎麦屋へ行き、新蕎麦の香りと味を堪能し外に出ると、日の暮の早い山は俄に冷えてきた。中七下五により訪れた店が想像できる句となった。

干蒲団に五体ひらくや無我となり 加賀 葉子

冬の日を存分に吸った蒲団の匂いと感触は何物にも代えがたい。「五体ひらく」に満足感が伝わり、生活の中のささやかな幸福感が溢れてくる。「無我」になれることこそ晩年を迎えた私たちの至福の時かもしれない。

大噓 三つ残して早寝かな 久留島規子

昨年11月頃からインフルエンザが流行し始め、正月休み明けの今も患者が増加しているとか。作者は続けざまに3回の「大噓」。風邪には休養と栄養が一番と早寝を決め込み、実感のある句となった。昨年末から早々と花粉症を訴える人も増えて来たとか。この大噓の原因は何だったのだろうか？

消灯の早き病棟大噓 三村紀子

こちら大噓の句。病棟の消灯時間は早い、そんな病棟に響く「大噓」。眠れぬままにいる人々を一斉に起こしてしまいそうの大噓。ここに句材を探り当てた作者のお手柄。最近つくづく思うのだが、男性の噓は何故あんなに大仰なのかと……。私などくしゅんくしゅんと可愛らしいものなのに。

賑はひの上野の山の社会鍋 一由久美子

上野公園は何時行っても人で溢れている。「社会鍋」とはキリスト教救世軍の歳末助け合い行事、大きな鉄鍋を吊るし、道行く人に喜捨を仰ぐものである。私もかつて場所は忘れたが、見かけたことがあり、年末の風物詩である。説明などいらぬ、目の前に景が広がってくる句である。

柚子挽いで呉る垣根の長話 喜多尾明子

通りすがりなのか近所なのか、声を掛けられ柚子を頂い

た。ついつい世間話に花が咲き思わぬ長話になった。主婦の日常のあるあるである。作者はこの長話を楽しんだのか、あるいは少々迷惑だったのか色々想像が広がる句となった。

うからやから来さうな気配おでん煮る 大村峰子

作者は現在静岡市の中心部から車で二時間以上掛かるダムの村に独り住まい。心配して身内の方が定期的に様子を見に来てくれるそうだ。今日は来てくれる筈だからと、いそいそとおでんを煮ている作者。作者と身内の方のよい関係性が窺がえる句である。「うからやから」の斡旋によりリズム感のある句となり、弾んだ心が表現されている。

木犀や軽く会釈を交はず路地 松下信子

路地の暮しは現代でも人間関係が密のようだ。木犀の香りにたまたま迷い込んだ路地で人とすれ違った時、軽く会釈が交わされた。隣近所との関わりが希薄になっている現在、路地での日常にほっとされたのかもしれない。木犀の匂う路地のありようが想像され、季語が生かされた。

漬樽の糠に混ぜ込む柿の皮 福島吉美

お住まいの徳島市は市内に河川が多く、冬場は風が強い。万福寺さんの近くには四国三郎吉野川が流れ、川風に干した大根を沢庵漬にされている作者の姿が想像される。沢庵漬に柿の皮を入れると自然の甘み、うまみの向上、美しい色合いが期待できる。それは昔の人の知恵。その知恵を生かし今年も美味しい沢庵ができたことでしょう。大黒さんとしてご多忙な毎日を送る作者が、日常の一齣から探り当てた句。

梅の里 大内佐奈枝

たたみ来る春潮厚き大洗  
 崖椿海に展けて磯神社  
 偕楽園日向も陰も梅盛り  
 梅が香や藩主御座の間好文亭  
 家苞の納豆提げて梅見かな  
 大手濠越しの藩校梅ひらく  
 慶喜の恭順の間の梅白し  
 紅梅や維新に散りし殉難士  
 水戸さまの二夕間続きの雛の壇  
 武家構へ駒止め土手の名草の芽



子規は21歳の春、学友と二人で水戸の親友を訪ねています。常磐線は開通しておらず、旧水戸街道を千住より二泊三日の徒歩で。

街道沿いの石岡は私の郷里であり（二日路は筑波にそふて日ぞ長き）と一句。

梅が満開の「偕楽園」にも立ち寄り（崖急に梅ことごとく斜めなり）の句碑が南崖の斜面にあります。

梅林の斜面は眺望も良く眼下に千波湖、遠く太平洋まで望めたのでしょうか。（アメリカの波打ちよせる霞かな）とも詠んでいます。

虫送り  
杉澤  
修

提灯を揺らし幼の虫送り  
虫追ひの空群青に暮れゆけり  
虫送り子らの掛け声鉦にのせ  
火の粉降る野川を鳴けり秋蛙  
虫を呼び闇を押しゆく実盛祭  
松明の燠を遠くに稲の風  
田の闇へ火屑を沈め虫流し  
空焦がし田虫送りの果てにけり  
火柱となりし松明虫供養  
一村をけぶらせ秋の闇深む



「虫送り」は松明を焚きその火に飛び込む害虫を駆除し少しでも多くの収穫ができるようにと農民の祈りが込められている。

静岡県内で唯一残るこの農行事は毎年8月23日に藤枝市の山間の村で行われ地元の子供たちが松明作りから参加し農道に立てられた約100本の松明に掛け声とともに火を移していく。辺りが暗くなる頃には全ての大松明に火が灯り闇を幻想的に照らし出す。この行事は次世代に伝える夏の風物詩として大切に引き継がれている。

## 石路の花

桔梗 純

友と来し思ひ出あまた石路の花

「石路の花」は初冬に厚みのある濃い緑の葉から花茎を伸ばし黄色の花を咲かせる。禅味のある鄙びた美しさをもっている。作者の御生家なのだろうか。

久し振りのお友達との再会に「石路の花」が効いている。懐かしさと、再会を待ちわびる思いが伝わってきた。

瀬戸内の汐のかをりや冬夕焼

何度か生まれ故郷の福岡と住まいの静岡を行き来した折に瀬戸内を通ったことがある。日本海側、太平洋側とは違う美しい情景に息をのんだ。実際に住まわれている方たちには誇らしい地であろう。

掲句の中七下五が、読み手をその場に誘ってくれた。

朝日中牡蠣積む舟のモーター音

牡蠣と言えば広島。牡蠣の収穫は寒さの厳しい冬の夜中に行われ、舟が港に戻ってくるのが「朝日中」との事。昨年は温暖化による海水温の上昇でたくさん牡蠣が死滅したと報じられた。広島に限らず異常気象による海産物、農産物の被害は各地に及んでいる。

「舟のモーター音」により日々の営みを活写した印象深い一句である。

仏壇を閉ちて冷たき風の中

石路の花の句で出会ったお友達とのしばしの別れ、さらに亡き人々との別れの時がきた。

「閉ちて」に又来るからねとの思いと「冷たき風の中」に肌感覚だけではない切ない思いも描き出された。

## 記紀の道

中山芳教

初御空日は須く記紀の道

作者のお住まいの宮崎県は国生み神話から天孫降臨、そして神武天皇までの歴史の舞台となっている。

物語性の強い「古事記」と、記録を主とした「日本書紀」を「記紀」と併記すべきでないとする説もあるが、どちらも日向（ひむか）が舞台である。

「日は須く」が郷土を愛する作者の心を表している。

丘陵の円墳遥か桜雨

記紀の地として古墳（円墳）も多数現存している事だろう。丘陵を遠く臨みながら桜の花びらの混じる雨に濡れている、しんとした美しい景である。

ただ季語に「花の雨」はあるが「桜雨」は無い。この句「花の雨」は考えられないだろうか。

鶴戸宮に黒潮満ちて秋麗

日向灘に面した神秘的な洞窟の中に朱塗りの本殿が鎮座する鶴戸神宮。海岸沿いの絶壁の洞窟までは赤い欄干の階段が長く続いていて太平洋も望めるらしい。

「秋麗」により、穏やかな豊かな海の光景が眼前に重なるように見えてきた。

おもて様連れて道行神楽宿

「おもて様」とは神楽に使われる仮面。おもて様が神そのものであり御神体として崇拝されている。作者の言葉には200以上の集落に神楽が残っているとある。これはおそらく星の神楽と言われる銀鏡神楽の景であろう。大事に受け継がれた版かな様子が描かれている。

## 私のこの一句

抱き上ぐる嬰兒ずつしり桃の花 高田たみ子

令和4年「万象」4月号の句。思いがけず内海先生の佳句に選ばれ、「嬰兒」と「桃の花」が響き合う取り合せは絶妙、との評を頂き、とてもうれしかったことが懐かしい。

新築のお隣の家に、新婚のご夫婦が引越して来られた。若いお二人は、とても気さくで心優しい方たち。女の子の赤ちゃんに恵まれ3ヶ月も過ぎた頃、大事そうに抱いて我が家に見せに来て下さった。それからは回覧板を持つてくる時に赤ちゃんを抱いて……。ある日突然抱っこしてみませんかとポンと渡された時の句。赤ちゃんは思いのほか重かった。

峰雲に一振りしては病衣干す 新妻 奎子

当時は入退院を繰返していた。

汗ばんだパジャマ・下着などを毎日洗濯しては盛大に庭に干した。夏の盛りとてすぐに乾く。

空には入道雲が力強く、それこそもくもくと湧き上がっていた。それはまさに「生命力の塊」だった。とっさに病衣を掲げて、その強い生命力をこのパジャマに入れて下さいと祈った。「お会いしたくない選者の先生が、「これは折りです」と、特選にとって下さった。嬉しかった。

手を握るだけの面会石路の花 穂刈照子

施設に入って間もなくの父が大腿骨を骨折した。掲句は無事に手術が終わり、初めて面会に行った時のもの。麻酔から覚めきっていないのか、言葉を発することのない父の手をただ握るだけだった。

帰りに道端に咲いていた石路の花の明るさが眩しかった。それから半年ほど経った頃にもう片方の大腿骨も骨折してしまい、もう歩くことは出来なくなった。認知症も進行して会話も難しくなってきた。手を握ることが唯一のコミュニケーションである。力強く握り返してくれるとほっとして何だか嬉しくなる。

ふりかぶる指揮棒の先牙返る 荻野加壽子

所属している句会では数年前より季語や漢字一文字など、その場で題を決めた席題を一句提出している。時間は15分以内。この時の題は「指」であった。

早速記憶の抽斗を探る。浮かんだのはオーケストラの情景。これから始まる演奏への期待感と緊張感の綯い交ぜになった静寂の一瞬を「牙返る」の季語と取合せて成功したのではないだろうか。いつもは句を弄っては残念な結果になることも多いが、即吟故に思い切ることが大事。さらに句友らの大胆な発想に学ぶことも多い。有意義なこの機会を楽しんでいる。



静岡 松永 博子

星月夜

ふうはりと溶きたるたまご菜種梅雨  
 花冷えや急須の縁の欠けひとつ  
 梅雨晴の街に弾くやへりの音  
 靴音の遠のきにけり星月夜  
 ハイエナのコンクリート舎そぞろ寒  
 裸木を映す川面の動かざる



武蔵村山 松井 宣夫

梯子乗

鳶口に命を預け梯子乗  
 長距離便運転席に初荷旗  
 初糶の市場に響く祝詞かな  
 桐の花ビルの隙間に堂々と  
 クーラーの前に居座る座敷犬  
 漢方堂亭主自慢の猿茸



金沢松田好子

## 神名備

青空へ溶け白鳥の点となり  
神剣を祀るお社神の留守  
神名備の鶏と目の合ふ小六月  
息合へる二礼二拍手冬うらら  
加賀富士の仁王立ちして寒に入る  
手のひらに震へてゐたり雪螢



松山入河大河

## 無常

色変へぬ松を左右に桜田門  
荒星や東京駅の更けゆける  
鬚ぴんと内蔵助像凍てゐたり  
ビル火事や無常の煙立ち上り  
赤黒き梅の冬芽や泉岳寺  
狚犬の尻込みしたる鳥の糞



市川 奥澤 よし江

## 枇杷の花

松籟や初声くぐる大鳥居  
 粉雪の紙垂にまとはる神楽殿  
 岸辺まで続く家並の松飾  
 いか焼きの匂へる路地や花八手  
 人知れず匂ほのかに枇杷の花  
 遥かまで鈍色の海芽水仙



金沢 井端 久子

## かくれ里

石段を踏みゆく足裏さはやかに  
 奥宮へしなやかに消ゆ穴まどひ  
 魚粉煮る煤けし竈草の花  
 霧速き湖に現れ一人舟  
 鳥渡る湾に沿ふ村弓なりに  
 萱門に日向の温み秋惜しむ



那覇 辺野喜宝来

通りすがり

せせらぎの日の斑に拾ふ木の実かな  
 石獅子の口のゆるびや冬あたたか  
 掃かれたる枯蟻螂に日の匂  
 海光や通りすがりの葱畑  
 花甘蔗の高きへ風と波音と  
 水に触れ奥へ奥へと冬の蝶

特集

大学俳句会の現在

- 北大俳句会／東北大学俳句会
- 福島大学俳句会／新潟大学俳句・短歌会
- 筑波大学学生俳句結社「桐一葉」
- 都留文科大俳句会／東大俳句会
- 早稲田大学俳句研究会
- 愛知県立大学短詩同好会「うたかた」
- 新大俳句会／関西俳句会「ふらこ」
- 愛媛大学俳句研究会
- 岡山大学俳句研究会／九州学生俳句会
- ◎今月の華
- なつはづき／矢野景一
- ◎巻頭三句
- 今井聖／岸原清行
- 岡田一実／大高翔
- 清水伶／今瀬一博
- ◎俳句と短歌の10作競詠
- 若杉朋哉＋鍋島恵子
- ◎人と作品
- 内村恭子句集『多神』
- ◎追悼・茨木和生
- 谷口智行／杉田菜穂
- 朝妻力／中村雅樹
- 森田純一郎
- ◎好評連載
- 成瀬政博
- とりあえずの日々
- 浅川芳直
- 俳壇ランドスケープ
- 青木亮人
- 句の手触り、俳人の響き
- 大西朋
- 俳句へのまなざし
- 橋本喜夫
- 俳句のレトリック
- 神作研一
- てのひらの江戸
- ― 古典籍を旅する
- 藤村公洋
- 俳句のつみみ
- 秘矢まりえ
- 諸家書架
- 石井隆司
- たもとほろ
- 俳句よもやま話
- 二ノ宮一雄
- 一望百里
- 「菜の花」吟行記 平賀節代



2026年4月号

3月20日発売  
 定価1300円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180



## 子規の写生論の展開 (五)

高木良多

〔承前〕

子規の「随問随答」によると、ある日、門弟の一人が「竹藪の中に椿の盛りかな」とか作句を試みるに意に満たず、どうすればよい句ができるようになるか、願わくば高教を垂れよ、と質問したのに対し、子規は次のように述べる。

写生に往きたらばそこらにある事物、大小遠近とと尽く詠み込むの覚悟なかるべからず。

大きな景色に対して二句や三句やうやくひねり出すやうにては逆とても埒うちあからぬなり。

大きな景色に持て余さばうつつ向いて足もとを見るべし。

足もとに萌ゆる草、咲く花を一つ一つ詠まば十句や二十句は立処たつところに出来るわけなり。

蒲公英たんぽぽあらば蒲公英を詠め。

嫁菜よめなあらば嫁菜を詠め。

豆の花まめはな咲き居らば豆の花を詠め。

畑打はたきつ人を見つけたら畑打を詠め。

芽をふく樹を見つけたら木の芽を詠め。

霞かすんで居たら霞を詠め。

うら、かな天気であつたら、うら、かやと遣やるべし。

日永ひなが、長閑のどか、暮春、夏近、桃花、楊柳かたやなぎ、摘草、踏青、

燕はらみ、孕雀、材料は捨てる程にぶらついて居るなり。

そんな沢山ある材料を等閑に見過し、やうやう藪やぶの

中の椿を見つけて、これより外に善き材料は無いと思

ふ事いと狭き量見なり。云々

俳句に詠む材料はその辺にいくらでも転がっているから、その材料に即して、そのまま詠めばよいというのである。

\*子規が述べた部分、原典では改行なしになっていますが、読者の理解を進めるために、敢えて改行して掲載しました。

(編集部)

(次号につづく)

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ③

橋本 清

春されば我屋の里の川門には  
鮎子さ走る 君待ちがてに

（五・八五九）

「春になると、我が家のある村の川門では若鮎が飛び跳ねるように泳いでいます。あなたのお越しを待ちきれなくて。」

村の娘が男の訪れを待ち焦がれている歌。春、川を遡って来る若鮎に、自分の姿を重ね合わせています。映画で言うなら、オーバーラップ（二重写し）の技法です。

「鮎子」は、春先、海から川に遡上してくる若鮎のこと。「明鏡国語辞典」は、若くて生き生きとした姿の比喩に用いる言葉として、「若鮎のような娘たち」という例文を挙げています。若鮎がびちびちと跳ねるように泳ぐ姿と、若い娘が男の訪れをわくわくしながら待つ思い。その両者に共通する、潑刺とした生命の躍動感。それがこの歌の魅力ではないでしょうか。ちなみに、子規の（若鮎の二手になりて上りけり）は、若鮎の生き生きとした姿を活写した句として知られています。

「川門」は川幅の狭くなった所。そういう場所は大抵、浅瀬になっており、渡り場、水汲み場、洗濯場などに利用されてきました。つまり、村の娘の生活の場でもあったわけですね。

「さ走る」のサは接頭語。下の語に勢いを加えています。ハシルは素早く動くこと。後で例を挙げますが、平安時代の言葉で「胸はしる」と言うと、胸がどきどきわくわくするという意味になります。ハシルという動作が本質的に持っている躍動感から派生した用法でしょう。

人に逢はむつきのなき夜は思ひおきて

胸走り火に心焼けをり（古今集一九・一〇三〇）

「あの人に逢うつき（手だて）の無い、この月の出ていない夜は、あの人のことが頭から離れず、胸がどきどきし続け、ばちばちと飛び跳ねるような胸の火で心が焼け焦げるようです。」

伝説の美女、小野小町の歌です。「つき」はツキ（手だて）と月を掛け、「胸走り火」は、胸ハシリとハシリ火を掛けています。

この走ルという語には、はるか後世にもこんな例があります。

美しき緑走れり夏料理（星野立子）

夏料理は見た目の涼しさも重視されます。キャベツやキウリなどの夏野菜の緑が爽やかに際立ち、今にも走り出しそうに見えるのです。涼味満点の夏料理を目の前にしてわくわくしている。その心躍りが命無きものに命の躍動を見出しているのです。



## 俳句と血圧

武蔵村山 松井宣夫

先日、エッセイストの嵐山光三郎氏が亡くなりました。私は氏が本名の祐乗坊英昭で若者雑誌に連載していた頃からのファンです。月刊誌「太陽」の編集の傍ら、退勤後はスーツを脱ぎ、新宿でホームレスになりすまして通行人を観察。自分への無視、軽蔑、たまに同情……究極の人間観察がよく描写されています。

嵐山光三郎のペンネームに変えてからは、「ヘタウマ」な絵の安西水丸氏との珍道中が紹介されました。怪しい飲み屋での武勇伝等を多く執筆。無頼派といえるでしょう。

「万象」誌にも、俳人協会編の「お

いしい俳句」が連載され、鋭い観察眼で、テンポ良い鑑賞文を楽しませてくれました。  
俳句と血圧、どちらもテンポが大事なようです。

## 一喜一憂

金沢 松田好子

加齢とともに塩分に気をつけ、散歩、運動、血圧測定を心掛けています。どちらかというところ、私は低血圧。幼い頃から朝が苦手で、今でもなかなか起床できない。

子どもが小さかった頃、一緒に風呂に入り「さああがろう」と子供を抱き上げた時、目の前が真っ暗になった。気がつくのと、バスタオルに包まれ畳に横になっていた。血圧が下がったようだ。意識がなくても子どもをしっかりと抱いていて引き離すのが大変だったと、後で家族から聞いた。

先日、いつもの体調と違い首の後ろが心なしか痛かった。血圧を計ってみると上が170台に。その数値を見ただけで、さらに血圧が上がりそうにな

った。ストレスでも血圧は上がるらしい。最近では血圧の変動に一喜一憂している。

血圧と夫の話の女正月 好子

## 薬も飲まず二元気

佐倉 米田敏子

私は今年95歳になりました。この頃になると物忘れがひどくなり、それと同時に記憶力の衰退を感じるようになりました。これからは自分の殻を脱ぎ捨てて生活して行きたいと思っています。

血圧の薬を飲み始めたのは今から10年位前からです。長い間、薬のお世話になりました。寒さには弱くて、冬になると、首とお腹には手軽なホカホカカイロを使用しておりました。朝と夜には血圧を計り手帳につけ、200を超えた時は、先生より頓服を出してもらいました。

運動と食事には気をつけて、今では薬も飲まず元気で自分でも感心する程です。

城下町銘茶で一服夏の宵 敏子

## 一喜一憂

佐倉 鈴木隆久

目標数値が130/80未満と聞くと、数字と折り合いをつけるのもなかなか大変だ。測るたびに、オーバーする日もある。自分なりに散歩も増やし、食事も控えめのつもりなのに、翌朝の血圧がなぜか高めだったりする。

血圧というのは気まぐれな生き物のようで、努力などどこ吹く風といった様子だ。

治療目標の数値が出るまで何度でも計ることもある。どれが正解なのだろうか。「さっきの数字は何だったのだろうか？」と首をかしげる。機械の気まぐれか、自分の体の気まぐれか、もはや判別もつかない。

それでも薬を飲み、散歩に出かけ、塩分を控える日々を続けていると、数字と上手につき合うコツのようなものが少し見えてくる。そう思いながら、今日もまた血圧計の数字に一喜一憂している。

## 血圧の薬デビユー

静岡 野崎浩子

夜10時、そろそろ寝る時間と思っていた矢先のことです。

「地震か？」体が揺れている。5年ぶりに激しい目眩が起きました。

前回は耳鼻咽喉科で精密検査をし、特に異常が無かったので薬だけ常備しました。単なる目眩ならいいのですが、麻痺でも起きたら大変と、手を動かしたりして焦りました。

普段の血圧の数値はずっと正常範囲ですが、その時は170でした。

「気温の差が激しいのでその影響もあるでしょう」と医師に言われましたが、80歳半ばにしていよいよ血圧の薬デビユーとなりました。

## 新聞より

福岡 園田清子

血圧がテーマとの事でどう書けばと思っていましたら、その日の新聞に、興味ある血圧の話の記事がありましたのでこっそり読みました。それにより

ますと、昨年発表の高血圧治療ガイドラインでは「130/80未満」「薬の使い方の見直し」とありました。

私は若い頃には低血圧気味でしたが、年齢と共に数年前より高血圧になり、薬のお世話になっていきます。脳卒中や心筋梗塞などのリスクを避けるためにも、コントロールはとて大切だと痛感しています。

故郷の父は突然の脳梗塞の発作で86歳で亡くなりました。この先私も、日々の暮しの中であれこれ注意して、元気な80代を迎えたいと思います。父の年齢よりも少し長生きできればと……。お父さん見守ってくださいね。

## 「万象ノオト」投稿募集

▽8月号「川」(4月末日締切)

▽9月号「坂」(5月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

## 巻頭作家（三月号）プロフィール



菅原 雅子  
(金沢)

菅原雅子さんと句会でお会いしたのは、井村和子さんの後を引き継いだ中日文化センターの「俳句の手ほどき」であった。お話を聞いて驚いたのは、私の姪っ子の幼友達で、子供の頃の記憶にある「マーちゃん」だとすぐに思い出すことが出来た。

雅子さんは金沢生まれで、北陸学院短大の英語科を卒業後、紀伊国屋書店金沢営業所に勤務。大学の教科書、洋書の販売に従事していたそうだ。

その後、結婚してご主人の転勤で数年金沢を離れられた。一男一女の子宝に恵まれ、金沢に戻って来て子育てをされたという。

60歳を過ぎて、何か趣味をと思ったときに出会ったのが俳句だったという。その切っ掛けは杉田久女の「花衣ぬぐやまつはる紐いろく」であった。美しい着物や幾本もの紐の映像美、明治・大正の女性の生きづらさまで感じられたという。

文化センターの句会では、「短い言葉の深い宇宙に魅せられた」という彼女の感性の新鮮さに、将来性を感じられた。その間、公民館の句会に入り「風港」に所属。震災の後「風港」が終刊となり、「万象」に入会した。

「風港」時代の秀句に  
やはらかき母の掌桜餅  
星祭笹の枝しなる願ひ事  
秋祭半紙はみ出す祝ひ文字  
雪吊や夜は星座を従へて  
などがある。

「万象」に入ってから度々佳句に選ばれている。

令和6年10月号では

あいの風富山平野を一撫でに  
銀漢や言葉やさしき小津映画  
演目に反戦歌ありパリー祭  
などの作品が佳句に選ばれ、特に映画鑑賞が趣味で、年間100本以上は観るといふ作者ならではの作品も、「万象作品」の佳句として選ばれている。

令和7年5月号には

朝市の掛け声尖る頬被

この句に江見主宰は、「頬被」の季語を活かし、寒気厳しい真冬の空気の中で声の尖りを捉えているところに注目されている。その後、中日文化センターは、中條に代わり、谷渡末枝氏が指導している。また、「万象あかね句会」に入会し積極的に活躍されている。「今年70歳の古希を迎える。少し人生の終盤に差し掛かったことを考えるようになった。これからは、夫と日本中旅行をしたり、また、好きな映画鑑賞も続けたりしながら、俳句も楽しみとしていきたい」と、今後の抱負を語ってくれた。

この度の巻頭おめでとうございます。「あかね句会」「万象俳句会」での今後のご活躍が楽しみです。（中條睦子）

# 万象作品



## 江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

○まつ先にすすしろの土落としけり 燕 渡辺志ま

雑煮餅さいころ程にして貰ふ

七日粥犬のはべるを許しけり

冬うらら鳩菓子なべて小さな日

○着膨れて待合の椅子小さくなり 佐倉 鈴木美根子

山茶花の風誘ふごと散り始め

宿坊の僧のすり足廊寒し

デパートの包装美しき十二月

○霜晴の畑へ繰り出すトラクター 掛川 鈴木美由紀

鐘楼の枯蔓煽る海の風

あやとりの飽きることなし日向ほこ

冬の雨染む神木の洞深く

○去年今年ありし日の靴玄関に 茅ヶ崎 久保田富士子

入籍のほほえむ二人福寿草

買初のペンと手帳や旅ごころ

寒禽の声の落ちくるビル谷間

草を食む白鳥糞を落としけり 佐野 義本美智江

小春風艇庫に女子のスクワット

○冬木の芽棧橋に干す櫛と靴

着ぶくれて見入る呂宋るそんの茶壺かな

曇天の小さき綻び冬日差す 柏 村田由美子

たわい無き夫のひとこと冬ぬくし  
冬夕焼スカイツリーを焦がしをり

しんしんと時止めるかに今朝の雪

山眠る文知摺石を裾に抱き 三原 高尾早弓

○氷張る白きはやかに遠浅間

寒禽の声源泉の湯の熱き

病窓の大き初富士言ひ交はず

○薄暗き事務所に響く虎落笛 札幌 石田 睦

店先に冬至南瓜のごろごろと

小学校跡地に群るる寒鴉

大寒や飛行機雲は一文字 島崎 洋

冬將軍ふたご座流星群連れて

師のしるすチョークの響き寒の朝

冬鷺の少し動いて夕暮るる 杉山和廣

死する者生くる者にも冬銀河

枯野原天使の梯子通り過ぐ

凍道に棒の如くに転倒す 杉山鈴子

妣と来て木端拾ひし冬の浜

○雑踏に紛れて安し冬満月

よたよたと子も雪搔を手伝へる 札幌 竹重富子

冬茜淡く輝く窓ガラス

年の瀬や書店静かな活気満ち

豊穰の日を脱ぎ眠る枯野かな

寒禽の羽くつきりと白と黒 田邊政代

飛ばし合ふ下の句歌留多腕まくり

大熊の眠つてゐるか原始林 土門一平

冬霞坂の下よりバス明り

白菜の肉巻き主役の夕餉かな 土門 一

山並を越え初富士の頭出す

冬の月そろばん道路に足止まる

クリムトを飾る聖夜の金の渦 船橋明美

一人増え食卓せまきお正月

久しぶり書き順迷ふ筆始

年賀状声の便りに変はりたり 新庄 曾野部礼子

除夜の鐘記憶遠のく着所寝

年の瀬や仏の花もあたらしく

厨から捲り始むる初暦

寒厨ときに大きな湯気上がる 大江 安藤桂花

冬帽に髪を押し込め温々と

日々追はれめぐりめぐりて古曆

踏切音に棹の乱るる冬の雁仙台 富田洋子

割烹着下ろして母の初商

○眠る山うなりの続く発電所

○初雪や酒屋の軒のワイン樽新潟 齋藤 信

正月や座持ちのうまき母と妻

大氷柱 一本太き体育館

氏神の豊かな松に雪しづる

女正月婆三人のよく笑ふ

筆始畳に残る墨の跡

しばらくは虹を追ひたり夕時雨

北斎に浸る小布施の栗おこわ

大根引く砂を浴びつつ次々と

冬ざれや赤信号の目立つ朝

ばつさりと切られし枝に冬来る

単線の各駅停車冬うらら

出棺へ浄き賛美歌鐘呀ゆる

地震止みて心揺るがぬ年あらた

吉凶も仕切り直るや年始

孫たちと共に頂くお年玉芳賀 稲川清子

初雪や子を櫓に乗せ父が曳く

仏壇に味噌炒めなる露の蓋

霜どけに光る菜のまま味噌汁に芳賀 福武幸子

作務衣脱ぎ袈裟着け直す煤払

凍空に鴉くぐもる声吐けり

ふんはりと母の形見のコート着て鹿沼 渡辺利子

集まりて鶴を折りたる女正月

訪ね来し幼の子守初仕事

雑木林隈なく染めて初日の出栃木 飯塚キミ

初雀首をちぢませ弾みたり

御降りや空も大地も白き朝

冬鷗後を追ひたる漁舟佐野 仲山さよ子

二千年の楠の大樹に冬日差

冬空に青さ極まる相模湾

初雪や遠富士の襲濃く淡く志木 汐見克彦

鉄道の架線を染むる冬夕焼

玉砂利にはじくる光明の春

今日一日今日一日と年暮るる新座 多田英治

窓に差す初日に祈る事二つ

初雪に初転びせし妻笑ふ

○「還付金受け取りますか」と初電話 千葉 加藤浩子

野仏の膝に遊べる寒雀

十字架のピアスの漢初詣

宗匠も弟子も椅子席初点前

書初や毛先の曲りなだめつつ

初電話姉の滑舌朗々と

空風や等圧線の数かぞへ 成田 宮本うらら

檄飛ばす消防訓練寒の空

日の丸のはためく初春大通り

熊笹に落葉の滑る奥の宮 酒々井 小林あけみ

大年の茅の輪や雨の石畳

冬の虹荒鋤きの田の黒々と 佐倉 新谷八郎

水洒れて鯉は動かず水底に

御降りや白きベンチと切株と

山茶花の錆びて散れるを待つ蒼 有泉正夫

踏石に丸下駄揃ふ初しぐれ

初夢や曾良と旅する良太さん

○嚴冬の中に一燈赤提灯 杉田富美代

冬帝や優勝力士ウクライナ  
着ぶくれて上半身は達磨かな

蔦枯れて幹あらはなる山の裾

冬夕焼思ひ出はみな浄化され 佐倉 鈴木隆久

○古本の冬日の奥に主居て

樹木医の木槌の音や冬構

霜掃いて昭和の路地の匂かな

目刺焼く指も腕も太きかな

終バスの客は我のみ春寒し 船橋 近藤澄子

初夏の旅夫の遺影を胸にだき

田楽は夫の好物なりしかな

風鈴のやさしき風の昼下り 山口秀吉

初雪や窓ひと色に変わりはりたる

初雪や音なき音に目覚めけり

初雪や雪が吸ひ込む街の音 柏 鹿毛満子

○獅子舞の交代待つや正座の子

鯉の口指によりくる今朝の春

目をとどて熱きひとくち蜆汁 松戸 石川幸子

竹林を逸れたるのちや冬鶯

浮寝鳥水面揺らぎて光りをり

バス停にまた近づくや寒鴉 寿多映子  
静寂てふ音籠めたるか雪二尺

落日や呆けきつたる枯尾花

十階の窓に富士山女正月

柿たわわ雲間に薄き昼の月

冬菊のいよいよ白し朝の露地

飛行機の翼輝く初御空

去年今年姿勢正して茶を一服

初雪を屋根に真紅のスポーツカー

手びねりの茶碗選びて初点前

十一月肩の碎けて入院す

神無月無言でひとり薬のむ

退院は銀杏黄葉の散る朝

親と子の手加減無用歌留多取

竹スキー竹馬の友ら傘寿過ぎ

子らのゐて一病息災初笑

念仏の舌に絡まる寒暮かな

板塀の節穴に揺れ照紅葉

良き人は吹雪くホームの角に立つ

気前よき母でありしよ年の暮

三姉妹一人残りて晦日蕎麦

この写真葬儀用にと袖湯かな

初御空雲一つなく晴れわたる

組重の栗きんとんにみたりの手

楠の上枝に一羽初鴉

仲見世の老舗に大き福だるま

大入りの文字高々と初芝居

○仲見世の人形焼を買初に

ふる里や主なき庭に柿残る

空つ風にとぎれて聞こゆ立ち話

寒暄や未だ木立の動かざる

手術終へ片目の一步冬ざる

シルバーの研師の一団十二月

冬ざるる刑場跡に石路の花

髪切つて取り掛かりたる年用意

初買は夫の緑のソフト帽

○氏神の小さき社に初詣

昼も夜も小春の匂ひ猫の首

初詣ポニーは尻尾揺らしたる

裏庭の大日如来笑む二日

雪だるま歩きしやうに道ができ

書初は世界の平和一年生

東京

渡部洋子

安藤美酒々

大場八朗

北口富栄

齊藤孝夫

高野翠子

東京

鶴田智美

中澤桃子

橋本紀代子

長谷川信也

長谷川はるみ

平子甲奈

前川昇

初雀小さき庭をつつきをり

遠山の麓遙けし夕刈田 東京 宮崎正義

ひらひらと何処に飛ぶや冬の蝶

第三弦教授の看板秋の風

小寒や江ノ電軋み動き出す 調布 荒井 仁

蹴寒試合の手を握り締め控への子

進路室寒星とほく見上げたる

駅前でもたの日誓ふ忘年会 三鷹 南場雅子

膝かばひ散歩する道師走かな

散歩道山茶花の赤祝ひけり

○人日や温め直す朝の粥 府中 竹村晃子

引き締まる書家の筆跡初暦

蠟梅のゆるみ始むる甲斐の里 青梅 横井一美

学校のフェンスを飾る蔦紅葉

肌寒し雲の穴から青き空

取れ立ての匂ひかぐはし新牛蒡 横浜 岡 元枝

黒屋根に斑に残る雪の晴れ

寒月や靴音ひびく帰り道

着ぶくれて一般参賀に長き列

園深く藤の堅実の爆ずる音 加藤和子

夕暮れて富士山を背に枯葉掃く

久々の雨に匂へる花柎 横浜 坂本具子

雪富士やマラソン過ぐる松林

冬ぬくし落書広場の子供達

高層のビルの谷間の初詣 柴田雅春

梅雨の蝶土に吸ひ付き動かざる

残る蚊に顔を刺さるる畑の中

縁側に蟬の骸のころがれる

入院の友との別れ初時雨 長野高朋

冬晴や出船入船水脈残し

○隅々を掃き清めたり神の留守 伊勢原 山本カツ子

病む足を袖風呂の香に長々と

早三日富士を背にして駆け抜くる

初鏡割烹着の紐緩めけり 静岡 飯田優子

銀杏落葉ぬた場の土の黒々と

緑青の水屋の屋根に冬の雨

獅子舞を象る最中初詣 石川直樹

熱爛に「知床旅情」口遊む

凧や顰めつ面の道祖神

単線の鳴らぬ踏切山眠る

神木に神の声聞く神の留守静岡 伊東文恵

○齒ブラシもて蜜柑を化粧ひ糶箱へ

墳丘へほつほつ雨の冬至かな

山眠る湯煙の立つ隠れ里

轟音に冬野の揺るる駐屯地

小魚を閉ぢ込む瀬切り冬の川

きゆきゆと鳴く廊下踏み踏み小六月

坐禅堂のかやぶき屋根へ冬時雨

焼藪を食むやいさかひ収まりぬ

初雪に轍のうねる朝の街

小春日や演歌の響く町工場

年用意常より薄き手帳買ふ

行く年や重なる絵馬に雨しづく

初時雨緋袴絡げ巫女走る

冬川の石にとどまる鴉かな

ひしめきて縁戚集ふ初写真

○獅子舞の金齒かたかた札の辻

初夢のセピア色なる古希の歳

冬草に往古の礎石整然と  
冬菜畑赤石岳の陽を浴びて

伊東文恵

海野俊彦

奥川裕美

杉田義則

杉山巳代

高井明子

高橋一夫

くねくねと裏道たのし枇杷の花

おでん屋の女将鼻声いらつしやい静岡 田中秀幸

湯気の間店主の笑みや葱鍋

七五三抱つこをせがむ顔をして

鳥居まで運動靴の七五三

昼日中畑に出会す馳かな

実紫に肩打たれつつ立ち話

今朝の冬背中丸めてポストまで

枯枝の奥にかすかな水の音

羅漢像十一月の風の中

群鳥のどつと冬田を埋めけり

参道の麴屋前の春着の子

まなじりに薄紅さして初詣

神楽月笠雲を乗せ富士の山

冬霧のしづかに動く古墳山

初日の出防風林を越ゆる鐘

掠り傷そつと押さへてみかん剣く

元朝や馴染の顔と鎮守社へ

○春光やガラスに残る指の跡  
冬の雨社の森を煙らせり

田中秀幸

筑地裕子

内藤允昭

中澤祐一

永田公香

野崎浩子

長谷川洋子

枯芒石棺覆ふ石七つ

雛塚へ笥の水の音冴ゆる

冬景色畑に蠢くものひとつ

アンモナイトいだく化石や冬館

○獅子舞の身震ひをしてはじまれり

小春日やついつい増ゆる小買物

○荒れぬ間に済ます通院年の内

震るるや湯涌に指を温めては

あふるる湯温泉風呂の袖湯かな

玄関をあわてて出るや冬麗

初日記携帯持たぬ日々になり

来し方の走馬灯めく袖湯かな

闘病の友よりメール聖歌の夜

極月やここだけといふ話聞く

○凍星や靴音尖る紺屋坂

あざやかに表紙裂く音初暦

顔見世や風にこぼるる京言葉

チェロの音に雪しんと窓の外

海の面茜に染まる冬落暉

冬の空ジャングルジムに子等の声

燒津 小梁洋子

金沢 上野富貴子

北野陽子

新出祐子

菅原雅子

田上ナツ子

冬の朝金時草をみそ汁に 金沢 廣田宏美

荷の中に熟るる鬼柚子鎮座して

山裾にうつすらかかる冬の虹

六年生一人一枚紙を漉く

大小の紙漉き槽がの並びをり

○紙漉の土間のでこぼこひかりをり

湯気の中寄鍋囲む家族かな

肩上げを一つ下ろして七五三

庭掃除にはかに霰音たてて

結昆布餅にちよこんと漆椀

下の子に歌留多取らせて多く顔

寝正月決め込む母に孫来る

日や風に破れ垂れたる枯芭蕉

雪折れにゆらく竹藪雀どち

青空に真つ赤に枝垂れ実南天

風すさぶ庭に耐へある冬薔薇

潮騒を聞き渾身の夜番の柝

露こぼる水戸の浪士の殉難地

皴の手の母の作りし雑煮かな

白朮火を消さじと振れる火繩かな

かほく 能任康子

白山 朝倉みゆき

鶴尾正江

敦賀 川口和代

奈良 町田すみれ

かはらけの行方追ひたる厄払

襖絵の豪華絢爛秋の城徳島林 早苗

宴会の締め踊りや秋の宵

秋の雲映して青き長良川

山本晴美

句友より花束受くる秋深し

院内にポインセチアの赤緑

山本瑤子

是よりなほ事なき願ふ年の暮

陽を止めいろは紅葉の紅きはむ

○むらさきの風の段畑花辣韭 山本瑤子

其処此処に渦巻く鳴門秋の潮

浄瑠璃の太棹流れ蜜柑山小笠原田上幸子

鷹匠の女グロブ干してをり

○枯蓮田旅客機の腹映しけり 園田清子

冬木立メタセコイアは天を突く福岡

山茶花や今を盛りとバス停に 鶴田輝代

我の背を抜きたる孫へお年玉

電飾アート森も広場もクリスマス 鶴田輝代

○一輪の華やぎ凜と冬薔薇 鶴田輝代

思ひの欠片つなぎ合はせて年迎ふ 美山留唯

法然の教へを学ぶ小春かな

見定むる更地の生家冬の暮 輪唱に合はすステップ冬ぬくし那賀川高山ひさ子

○たこ焼をくるりと回し年の酒

縫初は子の作業着のほつれかな

痛でした告ぐる同僚冬銀河門川請関ゆかり

日向ほこ来世は野良の猫たらむ

初日の出我に伸びたる金の道

黄金の落葉掛け合ふ子ら二人国富山口孝治

両手より銀杏落葉の空に舞ひ

冬日向手つなく友の笑顔かな

筆庄の凹みに冬日集まりぬ那覇稲嶺有晃

○重なりし喪の一年やおでん酒

言の葉の墨の乾きや寒椿

川風を逃さず翔てり冬の鷺 大城末治

冬の雨兆す城趾の野面積み

川風や胸の高さに冬芒

水草の揺れて水鳥現るる 高嶺容道

悴める指の数ふるドル紙幣

海風に添へる小草や初詣

溢れたる金平糖に聖樹の灯 宜野湾 宜野 顕  
齒朶刈や川の流れのゆるきこと

○紅型の赤馬駆くる大旦那

晴れ着の子父が手を引く七五三 ベルン 森尾 舞

切売りの大根を買ひ独りかな

ちよつとだけ多めの給料クリスマス

### お願い

毎月の投句の際、次の二点をお確かめください。

\* 既に「万象」誌に掲載された句が混じっていないこと

\* 句に詠まれている季節が、掲載予定の月とかけ離れて

いないこと

## 万象基金のご報告

山本 右近様(埼玉)

一〇口

柳澤 宗正様(神奈川)

一・五口

匿名

一・五口

匿名

五口

(令和8年1月1日～2月28日・受付)

「万象」の発展のため、大切に使用させて頂きます。

万象俳句会

北から  
南から

## 小河内のひよんどり

静岡 大村峰子

「ひよんどり」は、静岡市最北の集落小河内に残る、元朝の若水汲みと一体となった祭事である。

祭事の内容は

(一) 共同井で世帯主が若水を汲む。(若水は炊飯に)

(二) 5時半の花火を合図に、世帯主が当屋(公民館)に集

合し、囲炉裏を中心にして懇談。

(三) 6時、祭壇前に正座。各自の弓張り提灯に点灯して、

ひよんどりの歌を奉納する。「代じよ代じよの床の間の

掛軸悪事災難のがるように」と。

(四) 一番から九番までの歌詞を各々の場所で歌う。

(五) 共同井では、「余り長いのは御家に不礼、これで止めお

くひよんどりを」と歌い納めとなり、当屋へ戻り、山

の端を染め始めた初茜に手を合わせる。

ひよんどりは「伊勢ソーホー(宗宝、宗法か?)」なる人

物が伝えたという。村の茶畑に屋敷跡が遺されている。彼は

曲げ物の技術と交換にひよんどりを行わせたという。

ひよんどり果ててダム湖の初明り 曾根 満

ひよんどりのお練りを待つや初茜 望月きみ江

若水汲む青き匂ひの柄杓もて 望月兼司



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に食偏の漢字を入れましょう。

- 1 柿□へば鐘が鳴るなり法隆寺 正岡子規
- 2 一枚の□のごとくに雪残る 川端茅舎
- 3 かりかりと螳螂蜂の貝を□む 山口哲子
- 4 輪□を掛けて使はず外厠 松本たかし
- 5 □壳が太鼓をたたく田植かな 山口青邨
- 6 雨音もせ、らぎも夏□かな 鈴木真砂女
- 7 高嶺星蚕□の村は寝しづまり 水原秋櫻子
- 8 ひし□のひし形は誰が思ひなる 細見綾子
- 9 短か夜の□ゑそのまゝに寝てしまふ 沢木欣一
- 10 秋雨や夕□の箸の手くらがり 永井荷風
- 11 濁り酒□んで将門品風かな 内海良太
- 12 音もなく柚の花散るや金環□ 飛高隆夫

- 【正解】
- |      |     |     |
|------|-----|-----|
| 9 飢  | 5 飴 | 1 食 |
| 10 餉 | 6 館 | 2 餅 |
| 11 飲 | 7 飼 | 3 食 |
| 12 蝕 | 8 餅 | 4 飾 |

# おいしい俳句

第14回 嵐山光三郎

## 饅頭屋の昼来る町や暮の秋 内田百閒

ひと昔前は、うどんの引売りがあった。屋台にうどんを調理する鍋と炭と并を揃え、道際できつねうどんやつきみうどんを売った。客は立ったまま食べた。秋の暮れになると、そのうどん屋が昼からやってきて繁盛している。百閒は岡山市生まれ、生家は造り酒屋である。東大独文科に入り、在学中に家庭を持った。

夏目漱石に師事し、生涯を通じての弟子だった。法政大学教授となったが、借金に苦しみ、住んでいた家は番町でいちばん小さな建物であった。小説・隨筆に傑作が多く、昭和十九年、戦争のために食べるものがない時代に、記憶のなかにある食べたい料理を書き出した『餓鬼道着蔬目録』が傑作。さわり刺身、生姜醤油、たい刺身、かじき刺身、まぐろ、霜降りとろろぶつ切、ふな刺身、芥子味噌、べたらノ芥子味噌、こちノ洗ひ、こいノ洗ひ、あわび水貝、塩ぶり、まながつを味噌漬など百点近くの料理名だけを書き出した。そのなかに「すうどん」(註 ナンニモ具の遣入ッテイナイ上方風ノ饅頭ナリ)が出てきた。百閒の文庫本(ちくま文学全集)を読みはじめたら、あまりの面白さに抱腹絶倒、冷凍うどんを茹でて腹にかきこんだ。

公益社団法人俳人協会

# 万象作品の佳句

江見悦子

まつさきにすずしろの土落としけり 燕 渡辺志ま

「すずしろ」とは冬の季語である大根のこと。すずしろとよぶときは七草粥に入れる「春の七草」の中の大根を指し、新年の季語となる。

1月7日の朝、七草粥を炊こうと「まつさきに」すずしろの土を落としたのである。土の色、よく太った大根の白と葉の緑が瑞々しい。一つまみの塩を入れて炊く、簡素だけれど正月料理に疲れた胃に優しい粥のうまさ。毎年恒例の、渡辺家の大切な年中行事である。

着膨れて待合の椅子小さくなり 佐倉 鈴木美根子  
寒い中、着膨れてやって来た病院の待合室。今日も大勢が診察を待っている。空いた椅子に座ろうとして、いつもより椅子が小さくなっているように感じた。そうか着ぶくれていたのだからこうなるんだと納得する作者。自分の姿を客観視したおかしみのある句。

霜降の畑へ繰り出すトラクター 掛川 鈴木美由紀

「霜降」は二十四節季の一つで、霜が初めて降る季節のこと。霜が降りて厳しい寒さの朝であっても、予定した農作業は延ばせない。「繰り出す」という言葉の力強さから、畑へと向かっているトラクターは一台ではないのかもしれない。

勢いのある場面を明るく的確に詠んだ。

去年今年ありし日の靴玄関に 茅ヶ崎 久保田宮十字

「去年今年」は新年の季語。大晦日から一夜が明けて去年から今年に移り変わることをいう。作者は昨年ご主人を亡くしている。「ありし日の靴」とは亡くなったご主人の靴だろう。毎日の散歩に履いていた軽快な靴のような気もする。玄関を出入りするたびに目に入るが、まだ片づけられずにそのままになっている。「去年今年」の季語が生きた。

冬木の芽棧橋に干す櫛と靴 佐野 義本美智江

「櫛と靴」とあるので、カヌーの練習場になっている川か湖の棧橋の情景だろう。練習が終わって愛用の櫛と靴を棧橋に並べ干している若者。辺りの冬木はもう芽をのぞかせている。新しい季節の予感に満ちた句。

たわい無き夫のひとこと冬ぬくし 柏 村田由美子

季語「冬ぬくし」は単なる暖かさだけでなく、寒さの中で身がほっとさせられる気分も加わる。

何となく気分が浮かない日、夫のひとことが心を和ませてくれた。それも何ということもない他愛のない言葉だ。長年暮して来た夫婦だからこそ通じるひとことなのだろう。「冬ぬくし」の季語の力を感じた。

水張る白きはやかに遠浅間 三鷹 高尾早弓

「水張る」で切れる句。水の水の張る朝、雪を抱いた浅間山をはるかに望んでいる作者。「きはやかに」は際立っているさま、くっきりと目立つさま、の意。眼前の水の色と浅間山を覆う雪の白、近景と遠景の対比が成功した。

薄暗き事務所に響く虎落笛 札幌 石田 睦

北海道の句であつてみれば、この「虎落笛」は寒風が吹きすさぶ中に響くさぞ激しい音であろうと思う。それも都会のオフィスビルとは違い「薄暗き事務所」なのだ。これからこの地で長い冬を過ごすとする作者の覚悟を感じた。

眠る山うなりの続く発電所 仙台 富田 洋子

すっかり落葉して冬日の中にうすくまっている「眠る山」に、発電所の低く鈍い音のうなりを聞きとめた作者。命ある自然と、発電所という無機的な物との対照が眼目である。

厳冬の中に一燈赤提灯 佐倉 有泉 正夫

厳しい寒さの中、帰り道に赤提灯の店を見つけた作者。かつては赤提灯に釣られて熱燗を一杯やってから帰ったものだが、さて今日はどうか、そんな思いを感じさせる。

古本の冬日の奥に主居て 佐倉 鈴木 隆久

昔ながらの古本屋が次々に店を閉めている現在、こういう句に出会ふと嬉しくなる。確かに古本屋の主人はいつも奥の帳場にひっそりと座っている。店先に並んだぞつき本に差す明るい冬日と、店の奥の主人の姿の明と暗が、懐かしい昭和の一齣のようだ。

氏神の小さき社に初詣 東京 長谷川はるみ

「氏神」はここでは「産土神」、住む土地の鎮守の神のこと。参拝客であふれる大きく有名な神社ではない地元のお社だ。行ってみて改めてその小ささに驚いた作者。それでも作法通り参って心が落ち着く。こんな初詣にも心惹かれる。

齒ブラシもて蜜柑を化粧ひ糺箱へ 静岡 伊東文恵

蜜柑の選果場の一場面。「蜜柑を化粧ひ」が楽しい。きれいになった一個一個が糺箱に移され、市場に出荷される。齒ブラシもて」と表現したのが現場ならではの。具体性が良い。こういう仕事の現場の句を今後も期待しています。

獅子舞の金歯かたかた札の辻 静岡 高井明子

獅子舞の獅子頭に頭を噛まれることは、厄除け、魔除けの意味があり、邪気を払ってくれるという。「金歯かたかた」というオノマトペが面白い。舞っているのは札の辻、江戸時代には高札が掲げられた往来する人の多い場所だ。舞手も観衆も一緒になって獅子舞を楽しんでいる。

凍星や靴音尖る紺屋坂 金沢 菅原雅子

「紺屋坂」とは、前田藩の御用染商（紺屋）が付近に住んでいたことからついた名で、兼六園に続くゆるやかな坂道。厳寒の星空の下、靴音が尖って聞こえたのだ。帰宅を急ぐハイヒールの音か。「尖る」に共感する。

枯蓮田旅客機の腹映しをり 小松島 田上幸子

一面に広がる枯蓮田を眼下に、高度を下げて着陸しようとしている旅客機。その巨大な白い腹が枯蓮田に映っている。いささか怖い場面だが、「腹」としたところに俳味がある。

紅型の赤馬 駆くる大旦 富野 宜野 頭

「紅型」は沖繩の代表的な文様染。鮮やかな黄色、赤、水色、藍色が南国の日によく映える。この句、紅型の布に赤い馬が颯爽と駆けているのだ。今年の干支、午年の元旦に誠に目度合い図柄だ。おらかな表現で、気持ちの良い句。

# 新中央句会報 (1月例会)

令和8年1月25日(日) 東京文化会館

(出席20名)

## 江見 悦子 選

|                 |       |
|-----------------|-------|
| 背合はせの駅のベンチや日脚伸ぶ | 大久保 進 |
| 残り福七人詰めてもんじや焼   | 安藤美酒々 |
| 追伸の方言をどる年賀状     | 村田由美子 |
| 枯れつくし立ちつくしたる大銀杏 | 中村千久  |
| 凍つる股打つて車夫発つ大提灯  | 吉中愛子  |
| 手拭を貰ひて帰る初芝居     | 松井宣夫  |
| 置炬燵転寝の子の泣き黒子    | 星野信子  |
| 不忍池ばうばうと蓮の骨     | 沢辺たけし |
| 寒すずめ柳撓めて鈴なりに    | 吉中愛子  |
| 里人の語尾のやさしき焚火かな  | 一由久美子 |
| 二歩三步四温にゆるむ膝頭    | 大久保 進 |
| ぼつかりと櫛伐られし寒の空   | 榎本文代  |
| 寒中の白樫に這ふ蔓かたし    | 一由久美子 |
| ⑧ 初春や埃をはらふ去年の計  | 大久保 進 |

⑧ 初春や埃をはらふ去年の計 大久保 進

「一年の計は元旦にあり」と言うが、今年の計を決めるに当たって作者は、さて去年は何をやろうと計画したのだったと考えている。「埃をはらふ」から、その計画が見事に実行できなかったと振り返っている作者。ありがちな話ではあるが、「埃をはらふ」とユーモラスに表現したところが作者ならではの。さあ、今年はどうなりますか。

残り福七人詰めてもんじや焼 安藤美酒々

「残り福」が新年の季語。1月10日の戎祭のことで、福の神の恵比寿さまに商売繁盛、家内安全を祈願する祭。大阪の今宮戎神社などが有名。縁起物を手にした人たちが賑わう中、立ち寄ったもんじや焼屋ではカウンターに7人もが詰め込まれた。そんな祭の雰囲気は大いに楽しんでいる作者。「七人詰めて」が具体的に面白い。

手拭を貰ひて帰る初芝居 松井宣夫

「初芝居」には心が浮き立つ。十分に堪能しての帰り際、手拭が配られた。役者の名が染め抜かれたものか、目出度い柄行きの手拭か、色々と想像がふくらむ。大劇場ではない下町の芝居小屋を想像した。

里人の語尾のやさしき焚火かな 一由久美子  
旅行の途中か、在の人々が焚火を囲んでいる場に行き当たった。誘われてしばらく輪の中に入った作者。その地方の方言なのか、口々に話す言葉に感じ入り、「語尾のやさしき」と詠んだ。今では記憶の彼方になった、ひと昔前には見られたあたたかな光景、小学唱歌の「たき火」を歌いたくなくなった。

中村 千久 選

|                |       |
|----------------|-------|
| 枯蓮の根方に映ゆる空の紺   | 長谷川信也 |
| 秩父路の白き溪谷滝つらら   | 南雲秀子  |
| 不忍池ばうばうと蓮の骨    | 沢辺たけし |
| 仏壇に朝日射し入る水仙花   | 榎本文代  |
| 買初の夫の動かぬ蟹売場    | 南雲秀子  |
| 二歩三步四温にゆるむ膝頭   | 大久保進  |
| 大寒の底頭なるあばれ川    | 内田郁代  |
| 藁屋根の深き裂け目や探梅行  | 一由久美子 |
| 寒鯖にまだ残りたる海の青   | 内田郁代  |
| 月光にさざなみ立つる寒の河  | 沢辺たけし |
| 大寒の日の出は渋谷あたりから | 久留島規子 |

一月の空広々と慈姑いろ 吉中愛子  
荒垢離や南無妙の声聞に凍つ 三屋英俊  
㊦ 包丁研ぐ鉄の句ひの寒さかな 榎本文代

㊦ 包丁研ぐ鉄の句ひの寒さかな 榎本文代

今回の句会の最高点句となった。鉄製の包丁を砥石で研ぐと独特の句ひがする。『砥ぐ』のものかとも思うが、掲句はそれを「鉄の句ひ」であると言う。一句の眼目は、そこに「寒さ」を感じたことで、この感じ方に多くが共感したのである。上五は「ほうちよとぐ」と縮めて読んでみた。

寒鯖にまだ残りたる海の青 内田郁代  
群青色と白銀色の縞模様美しい鯖。塩焼にしてよし、味噌煮にしてなおよしというものである。作者はこの季節の鯖に「海の青」を見た。芥川に「木がらしや目刺にのこる海のいろ」があるが、海の色把握だけならば、掲句の方に分があるような気がした。

大寒の日の出は渋谷あたりから 久留島規子

大寒の日の出は東南に見えるから、作者の住む杉並区高井戸からは、ちょうど渋谷の方向が明るくなってくるのだろう。この日は良太さんの一周忌の前日だった。自然体の句づくり、

固有名詞を活かした掲句に触れて、〈春はもう鳩居堂まで来てあたり〉を思った

榎本 文代 選

|                 |        |
|-----------------|--------|
| 早梅のあたりほつこりしてゐたり | 内田 郁代  |
| 背合はせの駅のベンチや日脚伸ぶ | 大久保 進  |
| 春を待つ掌に土筆絵の織部碗   | 三屋 英俊  |
| 生かされて紡ぐえにしや福寿草  | 大久保 進  |
| 大寒の瓦鍾馗の睨みあひ     | 鹿毛 満子  |
| 凍つる股打つて車夫発つ大提灯  | 吉中 愛子  |
| 寺深深渡り廊下の軋み冴ゆ    | 三屋 英俊  |
| ころころと喉落ちゆく寒の水   | 中村 千久  |
| 二歩三步四温にゆるむ膝頭    | 大久保 進  |
| 夕映えの沼枯蓮の乱反射     | 中村 千久  |
| 耳凍てて揺れる銀のイヤリング  | 江見 悦子  |
| 霜の夜は終ひまで読むミステリー | 久留島 規子 |
| 荒垢離や南無妙の声聞に凍つ   | 三屋 英俊  |
| 咳ひとつ子は台にのる望遠鏡   | 鹿毛 満子  |

④咳ひとつ子は台にのる望遠鏡 鹿毛満子

はじめは旅先での作と思った。よく考えてみると動物園であることに気付いた。子どもたちのために台の付いた望遠鏡が置かれている。「咳ひとつ」からは、望遠鏡を前にした子供の緊張感とわくわくした思いが伝わって来る。

夕映えの沼枯蓮の乱反射 中村千久

蓮の残骸をさらして荒涼たる沼。水面は夕日の光を受けて輝いている。その輝きを「枯蓮の乱反射」と強い言葉で詠まれた。枯れ果てて水中に浸っている蓮、哀れな姿は光に包まれている。

背合はせの駅のベンチや日脚伸ぶ 大久保進

人の行き交う駅のホームに置かれたベンチ。ホームの上りと下りに向いて背中合わせである。椅子に坐ると、日差しの伸びてきた明るさを感じられたのだ。

今後の新中央旬会の予定

|                         |       |
|-------------------------|-------|
| ▽4月26日(日) 東京文化会館 大会議室   | 13時より |
| ▽5月24日(日) 大妻女子大学 G棟411室 | 13時より |

花冷えや木乃伊横たふ硝子箱

子どもの頃から漢字はいつも興味を惹かれるものだった。中学、高校へ上がると、私のまわりには熟字訓だの宛字だのといったものも現われて、漢字の世界は広がっていった。

掲句にある「木乃伊」もそんな中にあつた。古代エジプトの柩の中に眠る、あの「ミイラ」のことだ。西洋言語の「マミー」という音に漢字を宛てた中国人の発明だと教えられた。

花の盛りの頃に、上野の国立科学博物館にぶらっと出かけたことがあつた。科学に特別の興味があるわけではなかったのだけれど、なんとなく足が向いたのだ。一階で天井からぶら下がる「フーコの振り子」を見てからだんだんと階段を上がっていくと、上階の展示室の一面に一体のミイラが安置(?)されていた。中南米のどこかの国からもたらされたものとの説明書きがあつた。干乾びた薄茶色のミイラは女性で、局部には申し訳程度の小さなガーゼが置かれていた。

死後にミイラにされるくらいだから、生前はそれなりに地位のある人の妃か妻女だったのだろうけれど、自らの骸が遙か遠くの日本の博物館の見世物になろうなどとは夢にも思わなかつたに違いないと思うと、いささか哀れを覚えた。

展示室の片隅に、立派とは言い難いガラスの箱に入れたミイラは、どこかひんやりとした、冷え冷えとした空気に包まれていた。季節もそれにふさわしい「花冷え」のころでもあつたので、こんな一句が残ることになつたのである。

\*ページ調整のための埋め草として、不定期に掲載します。

|   |   |   |
|---|---|---|
| <h1>俳句</h1> <h2>4月号 予告</h2> <p>3月25日発売<br/>予価1,200円(本体1,091円)®</p> <p>巻頭作品50句 小澤實<br/>作品21句 井上康明・山西雅子</p>   | <p>尾崎放哉没後二〇〇年</p> <h3>集 孤と独</h3> <p>自己との対話</p> <p>【総論】俳句と孤独<br/>【各論】放哉と山頭火／自由律俳句と孤独／<br/>「孤」「独」の入った俳句／孤独とユーモア／<br/>孤独に似た感情／孤独と美の関連について<br/>【鑑賞】孤独を剣き出しにした名句</p> | <p>令和7年度 俳人協会四賞決定!</p> <p>追悼 茨木和生</p> <p>角川俳句賞作家の四季 千野千佳</p> <p>※内容は表紙になる場合があります。</p> |
| <p>電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<a href="https://bookwalker.jp/">https://bookwalker.jp/</a>) など電子書店で購入できます。<br/>発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <a href="https://www.kadokawa.co.jp/">https://www.kadokawa.co.jp/</a></p> |   |   |

〈新会員の紹介〉

1月の新規加入者です。

岡本 秀子様 千葉県千葉市

細田 良子様 徳島県三好市

2月の新規加入者です

内田 孝子様 徳島県三好市

森 久子様 静岡県静岡市

福島 章友様 静岡県静岡市

長島 富美子様 静岡県静岡市

永島 美佐子様 静岡県静岡市

大木 政子様 静岡県静岡市

石川 真利子様 静岡県静岡市

〈お詫びと訂正〉

3月号11ページ、岡本敬子様への句に誤りがありました。お詫びして訂正致します。

誤 尾根雪の落つる藤音聞ふかし  
正 屋根雪の落つる轟音聞ふかし

俳人協会創立65周年記念

全国俳句大会〔一般の部〕のご案内

▽募集 二句一組 未発表作品・所定の用紙 又はコピーしたものを使用 何組でも可

(送) 1月15日より俳人協会ホームページからダウンロードも可能です

▽俳人協会以外の方の一般の方も投句・大会出席出来ます

▽投句料 二組につき千円 (小為替又は現金書留)

▽締切 令和8年4月15日 (当日消印有効)

▽送付先 〒190-0211 東京都新宿区百人町3-28-10 俳人協会〔全国俳句大会〕係 (電話 03-3367-6621)

▽選者 井上 弘美 今井 聖 今瀬 一博 小川 軽舟

小澤 實 榎 未知子 角谷 昌子 加古 宗也

片山由美子 岸本 尚敏 小島 健 坂本 宮尾

佐怒賀直美 白濱 一羊 鈴木しげを 染谷 秀雄

高田 正子 中原 道夫 西村 和子 西山 睦

野中 亮介 能村 研三 福永 法弘 藤田 直子

藤本美和子 松岡 隆子 南 うみを 三村 純也

村上喜代子 望月 周 森田純一郎 (50音順)

▽大会 令和8年9月8日(火) 正午開場・午後1時開会 (入場無料)

有楽町朝日ホール 東京都千代田区有楽町2-15-1 (電話 03-3284-0131)

有楽町マリオン11階 (JR有楽町駅中央口または銀座口・地下鉄銀座駅C1出口・地下鉄有楽町駅C1出口)

社会状況により開催の有無・収容人数等が変更することがあります 俳人協会にお問合わせ下さい。

▽俳人協会創立65周年記念大会につき、講演会を予定しております

▽賞 Ⅱ大会賞・秀逸賞・各選者の特選賞

☆大会終了後応募者に入選作品集をお送りします (お一人5冊まで)

☆応募作品の訂正・取消しには応じられません

☆類句及び一重投句については、入選を取消すことがあります

☆入賞作品は、俳人協会ホームページに掲載します

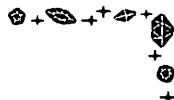
☆なお 大会当日、参加者より一句を募集し、特選・入選者に賞を呈します (投句締切、午後1時。未発表作品。投句料無料)

主催 公益社団法人 俳人協会

後援 朝日新聞社



## ルビーの小函 (4月号)



「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかつたもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- |   |  |
|---|--|
| 7 香しき (かぐわしき)<br>馬場 (ばんば)   | 25 野面積 (のづらづみ)<br>誰も (たも)  |
| 8 慈姑 (くわい)  | 26 草鞋 (わらじ)<br>肝文 (かんもん)   |
| 9 細やかに (こまやかに)<br>銜へ (くわえ)<br>海鼠 (なまこ)<br>齢 (よわい)<br>御降り (おさがり)<br>齋粥 (なずながゆ) | 探る (くすぐる)<br>肋骨 (あばらほね)<br>杜氏 (とうじ)<br>初手斧 (はつちょうな)<br>寒柝 (かんたく)<br>紅藻岩 (こうそういわ) |
| 11 統べる (すべる)<br>千木 (ちぎ)   | 28 隠沼 (こもりぬ)<br>遠近 (おちこち)  |
| 12 浅緋 (あさあけ / うすあけ)<br>上枝 (ほつえ)   | 29 罷る (まかる)  |
| 14 下枝 (しずえ)<br>詣じつ (そらんじつ)  | 40 初鞆 (はつせり)<br>祝詞 (のりと)   |
| 15 逮夜 (たいや)<br>同胞 (はらから)  | 41 神名備 (かんなび)  |
| 16 産土神さま (うぶすなさま)<br>影ろふ (かげろう)   | 42 紙垂 (しで)   |
| 17 涸池 (かれいけ)  | 50 文知摺石 (もじずりいし)<br>木端 (こっば)<br>着所寝 (きどころね)<br>温々と (ぬくぬくと)                       |
| 18 懇ろに (ねんごろに)<br>樫 (ゆずりは)<br>躰 (ねぐら)   | 51 小布施 (おぶせ) *長野県の地名<br>漁舟 (いさりぶね)   |
| 20 烟らせて (けむらせて)   | 52 漢 (おとこ)   |
| 21 昨夜 (よべ)<br>春著 (はるぎ)  | 54 職 (あかぎれ)<br>象る (かたどる)<br>口遊む (くちずさむ)<br>掬めつ面 (しかめつら)                          |
| 23 福沸 (ふくわかし)<br>鳩 (かいつぶり)<br>躰し (かわし)  | 55 葱鮓鍋 (ねぎまなべ)<br>出会す (でくわす)   |
| 24 比咩 (ひめ)<br>番鴨 (つかいがも)  | 56 笥 (かけい)<br>白朮火 (おけらび)   |
| 25 在す (おわす)<br>匠つる (いつる)  | 58 紅型 (びんがた)<br>大旦 (おおあした)   |
| 25 搦手門 (からめてもん)   |  |

# 北 南 西 東

## 消息等

江見悦子主宰、小林愛子名誉顧問の句

〔くぢら〕2月号に

栗剝くや思ひ出したるバスワード 悦子

〔初蝶〕「たかな」2月号に

朝顔のうすむらさきや綾子の忌 悦子

〔しろはえ〕第35号に

ハワイコナ挽く間に過ぐる初時雨 悦子  
地を這うて紅あはれ草の花 愛子

〔俳句界〕2月号

〔新作巻頭3句〕に福島せいぎ氏の句

天燈を真青な空へ放ちけり

飾り窓銭の成る木と盆梅と

爆竹の阿鼻叫喚や姫はじめ

〔日本農業新聞（2月7日付）のコラム〕おはよう名歌と名句」に柳澤宗正氏の句、宮坂静生氏が鑑賞

春の雪湯屋まで猿の下り来たる

（句集「運富士」より）

日本アルプスの麓、安曇野の常念岳の登山口に蝶ヶ岳温泉がある。湯量が豊富、いい湯だ。そこで中学時代の仲間のクラス会をやったという。70年余り前の少年少女仲

間。いちばん気が置けない無邪気な連中である。昔風にいうと青雲の志を抱いて世に貌（かお）を出した路（ふき）ほこ（路の藁）の集まり。飲んで騒いで湯に入る。春の雪に囲まれた露天風呂だ。そこに山

から猿が下りて来る。おーい猿君お入りお入り。俺も山猿。しばらくぶりだ。作者はわが高校同期。兄が瀧澤伊代次。（宮坂静生）

俳人協会栃木県支部賀詞交歓俳句大会

2月1日栃木県総合文化センターにおいて、栃木県支部賀詞交歓俳句大会が行われた。講師として佐怒賀直実俳人協会理事をお迎えした。令和8年の「主管結社」が「万象」であり、「万象」栃木県支部が中心になって大会を執り行った。皆の尽力で和やかな大会となった。（亀田やす子）

佐怒賀直実 入選句

被布の子をいつせいに鳩囲むかな 増田幸子

落葉どれも温き色して水子像 加藤秀代

島の宿秋の日の出を正面に 茂木弘子

マラソンの子へ鶴の声盛ん 阿部 澄

初時雨鏝阿寺までの石畳 島田和江

他選者 特選

すぐそこに冬が直立大銀杏 加藤秀代

俳人協会創立65周年記念俳句賞 作品募集  
対象 50歳以上の俳人協会会員

募集作品 未発表俳句作品30句

選考委員 片山由美子・能村研三・小島健

西村和子・小澤實

締切 令和8年4月末日

発表 令和8年「俳句文学館」10月号

応募料 三千元（定額小為替を同封）

なお、応募要項等詳細は俳人協会ホームページをご参照下さい。

〔俳句〕12月号掲載の能村研三氏の論（遠景と近景）が主宰誌「沖」2月号に転載されている。その一部を抜粋する。

能村登四郎の句をいくつか紹介したが、登四郎俳句に流れる写生精神は、目に見えるものだけを写し取ることに留まらず、かつて見たものが潜在意識の奥底に沈殿し、それが触発されて言葉として現れることを「写生」と捉えている。見たものを自分の中で時間をかけ濾過し、詩の言葉にするイメージの母体にあるものは誠実な写生精神なのである。

（報・編集部）

←この線より切り取ってください

# 万象作品

令和八年

八月号

(五月十五日締切)

(句の表記は歴史的かなづかいで) (\*の枠内には何も書かないでください)

|   |   |            |
|---|---|------------|
|   |   | 都または市・町・村名 |
| 姓 | 号 | がなり        |
|   |   | 年齢         |

\*

\*

\*

\*

\*

064-0808

札幌市中央区

南八条西15-1-5-904

万象作品投句係行

110円切手を  
貼ってください

| 氏名 | 住所 |
|----|----|
|    |    |

〈通信欄〉

## 編集後記

▽一昨年 of 肝臓の疾病、今年になつての心臓疾患と、カラ元気を装つていても身体は正直です。「五臓六腑七面倒や厄介や」と、ひと目上がりて遊んでいる場合ではないのだよと。栄養バランスのとれた食事、適度な運動、上質な睡眠、改めてこれらを心がけたいと思う春になりました。(千久)

▽節分の日に生まれた節子さんという友人がいる。夫の転勤先のNYで知り合つて以来、家族での付き合いが続いている。現地では句会(食う会?)に誘ひ共に参加していたが、「万象」の句会は長続きしなかつた。(規子)

▽帯状疱疹の発症から5か月目、まだ2種類の痛み止めを服用しての生活。この病は哲学的な病である。いつ治るのが定かでなく、これと言つた治療法もなく、対症療法があるだけである。24時間の痛みといかに共存するか? 痛みに拘泥し過ぎると日常生活が損な

われる。解がないのだ! (清晴)

▽先日箱根に行つてきました。大涌谷は、以前訪れた時より噴煙がたくさん上がつていて少し怖いような自然の力を感じました。箱根元宮では、駿河湾、相模湾を眼下に、雄大な富士山を間近に感じ、元箱根の箱根神社、九頭竜神社を参拝して帰つてきました。まだ寒い箱根でしたが充実した日帰り旅行でした。(久美子)

▽先日古本の中からガリ版刷りの冊子が出てきました。表紙に退職記念民話集とありこんな話がありました。主人公は労働と貧乏神が嫌い福の神は好き、その気持を短歌でやり取りするといった内容でした。民話も粋なものですね。(宣夫)

▽フキノトウを貰ひ、露味噌を作つた。味噌は千葉は佐倉のお味噌で香りがよく出来た。俳句を詠む人なのだから春の便りをしみじみと眺めて一句とすべきところ、まずは食欲が勝つている人なのである。(みや子)

## 会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万 象 俳 句 会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

## 万 象 四月号

第二十五卷 第一号  
通巻 第二八九号

令和八年四月一日 発行

主 宰 江 見 悦 子

発行人 江 見 悦 子

編集人 中 村 千 久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一-31-16 603

万 象 発 行 所

☎〇三六三二四一五七九六

「万象」創刊二十五周年記念

## 第二十四回「万象俳句賞」作品募集

万象俳句賞は毎年一回広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上・発展に資するものです。多数の応募を期待いたします。

作品 一人20句 未発表新作に限る

原稿用紙など一枚に縦書きとし、一通（コピー可）提出

原稿の冒頭に題名を、末尾に住所・姓号を明記

封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと

メールでの応募の場合は、応募原稿と必要事項を添付してお送りください

選者

江見 悦子 小林 愛子 中村 千久 福島せいぎ 柳澤 宗正  
中條 睦子 前田貴美子 榎本 文代 神田美穂子 沢辺たけし

応募資格 「万象」同人・会員に限る

締切 令和8年6月末日到着分までを有効とする

宛先 〒二七〇一〇二一六 千葉県流山市中野久木五六三一一

穂苺 照子（万象俳句賞事務局）

〈メール〉6845ubwn@jcom.zaq.ne.jp 〈電話〉〇九〇一二四二七一一五

入賞発表 「万象」10月号 全国俳句大会で作品一席に万象俳句賞を贈る